北支
THE NORTH CHINA

紫禁城

紫禁城全景（景山より）

北京皇城は、南に開く天安門を正門とし、北は地安門、東は東安門、西は西安門に亙る廣大な地域を占め、この所謂「前清の禁域」内には紫禁城を中心として大廟、社稷壇（現在の中央公園）、西苑（現在の北海公園並に中南公園）、景山寺あり、無數の殿堂廟祠が營まれ華麗無比の美觀を呈してゐる

皇城中央の紫禁城は明清兩朝の宮城とされたところ。明の成祖が永樂十五年（西紀一四一七年）南京より都をこの地に遷して、之を造營した。明に次ぐ清はその後を承けて或は之を重修し或は再興して今日見るが如き皇居として殘された

「山河千里の國。城闕九重の門。皇居

THE FORBIDDEN CITY, PEKING

平原の地に王宮を營む者は、王者の强大を民に誇らんがため、帝都の經營就中宮廷の豪華壯麗に意を用うるを施政の前提となすのが常であつた。帝制ロシアの宮殿經營、土耳古王國のそれの如き、何れも專制國家の王者の威風を示さんとする政治意識の表徵に他ならぬ。四圍を廣き隍と高き城壁を以て繞らし、四方に門を開き、四隅にそれぞれ角樓を起してゐる紫禁城は、まさに專制君主專橫の夢を偲ばしむる最大の遺跡である。之を紫禁と稱ぶのは、天上の紫微星が天帝の居座に當るの信仰に出づるものと云はれる

その城壁の高さ十八尺、周長約六支里、殆ど桝型をなして堅牢無比の城廓をなし、四方に開く豪華な門は、南なるを午門、北なるを神武門、東なるを東華門、西なるを西華門と云ふ。內部は外朝と內廷の二部に分れ、內廷は更に中路、內東路、內西路、外東路、外西路の五廓に分れてゐる。外朝は公式の用に供せられる部分で、正門は南なる午門である。東西に兩廡を附してゐるのが特徵で、城門として世界最大の建築である。午門を入れば御河に架せられた五座の金水橋あり、これを渡つて太和門に面する。步を門內に進むれば、遙かに高く太和殿、中和殿、保和殿の「三大殿」が相次第して壯大なる基壇の上に立ち、その後ろは內廷の正門乾淸門に終つてゐる

太和殿は四百餘州に君臨せる天子の正

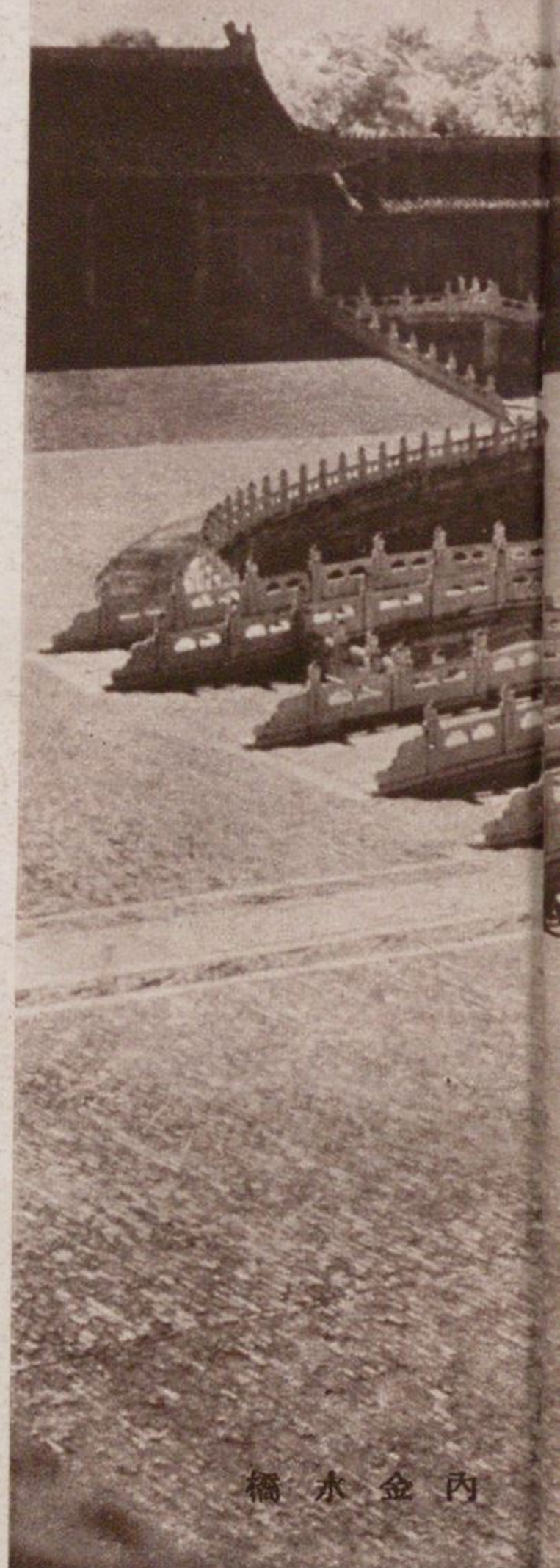
紫禁城　2

殿で、正面約二百十七尺、奥行約百十尺、中央の奥まりたる所に寶座を設け、その上に斧鉞を畫いた玉座を置いてゐる。毎歳元旦、冬至、萬壽の三大節及び國家的大慶典の際、王者は此處で群臣の賀を受けた。殿前の月臺の上には、銅龜、銅鶴と共に東に日晷、西に嘉量を配してある。蓋し民に正しき時と正しき量器を授けるを以て施政の要諦とせる古代の遺教を存せるもの、以てまた中國の古來立國の基を農業となし來つたことを說明するの資となすを得よう。中和殿は祝版、五穀、農具等を親閲したところ。その後ろの保和殿は、清代に於ては、毎歳の除夜外藩を招いて宴を張るところとし、又この保和殿に於て考試の最高位たる進士の試驗が行はれた

外朝に乾清門を以て續く北半部は內廷で、所謂後宮、帝后の寢所を始め妃嬪、侍臣、宦官等の住屋その他廟祠、佛堂、倉庫、苑囿等が營まれてゐる。廓內の中路は內廷に於ける帝后の正殿たる乾清宮、交泰殿、坤寧宮が同一基壇の上に相次第して立ち、これを中心としてその規模稍々小なれど前方外朝と略々同一の配置となつてゐる。內東路は中央の東六宮を主として、その南に奉先殿、齋宮及び毓慶宮を配し、內西路は南方にある皇帝常住の建物である養心殿を主として、その北に后妃の居所なる西六宮を配してゐる。外東路は所謂寧壽宮の一廓で太上皇の居所、外西路は皇太后の居所に充てた慈寧宮の建物を主としてゐる

かうした壯麗な區劃は、北の神武門外に聳立する人工の丘陵、景山の頂に立つて、一望のもとに俯瞰することが出來る。巨樓、殿宇は相稱均齊の浪をなし、一面に覆ふ黃琉璃の甍が旭日に閃く樣は天下の偉觀、大陸の蒼穹に向つて四百餘州の王者の權威を誇號するが如く思はれる

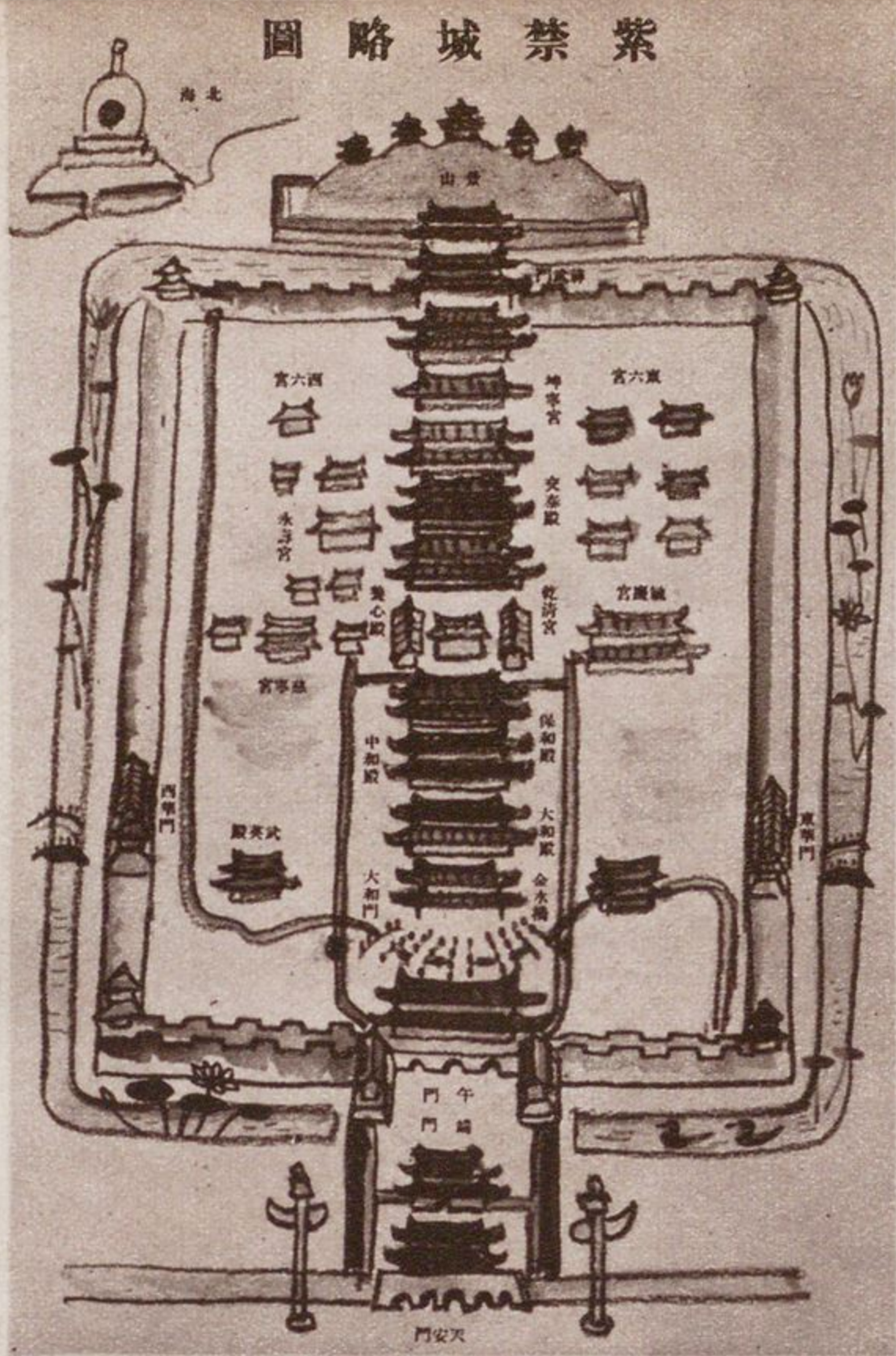
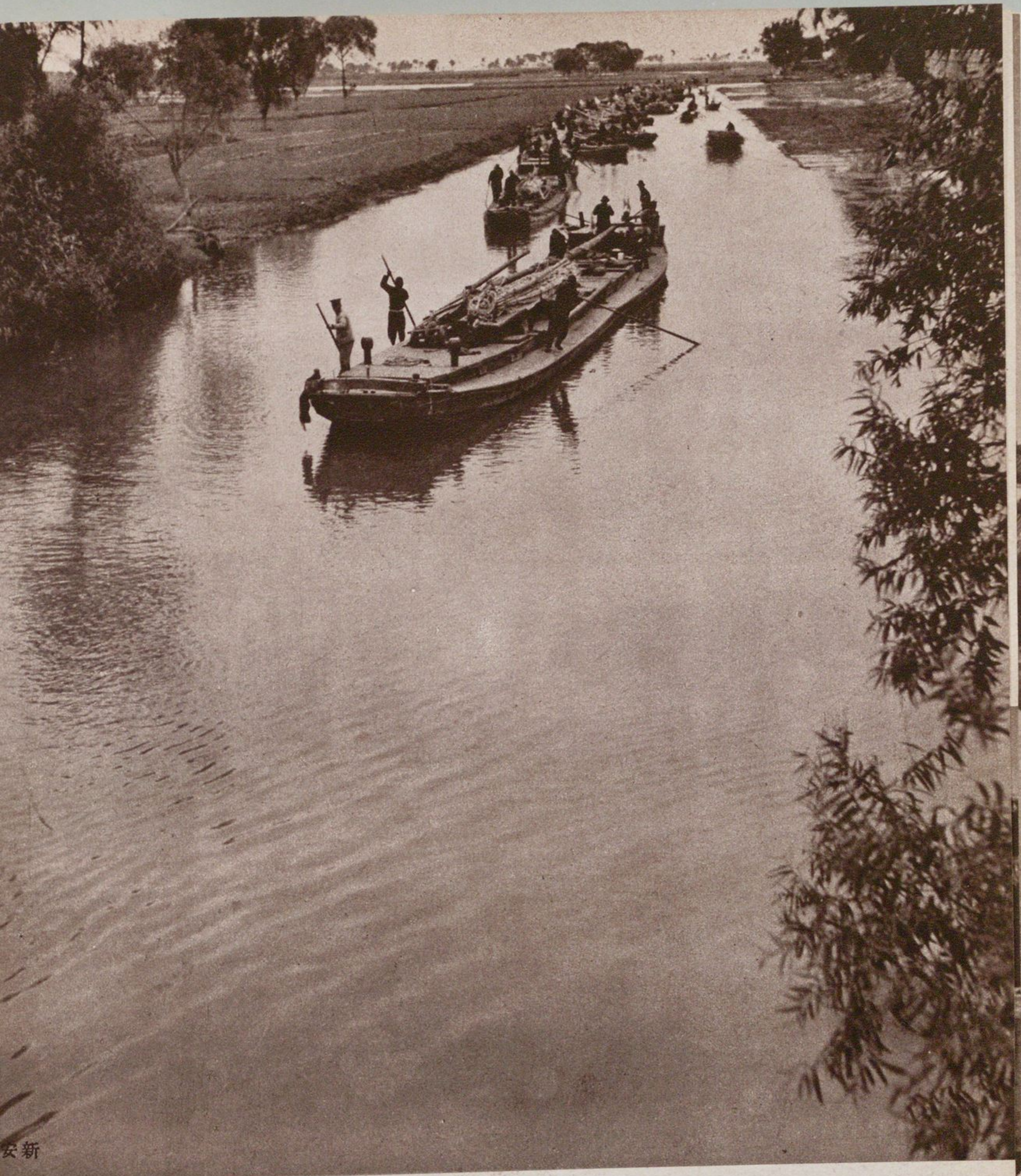
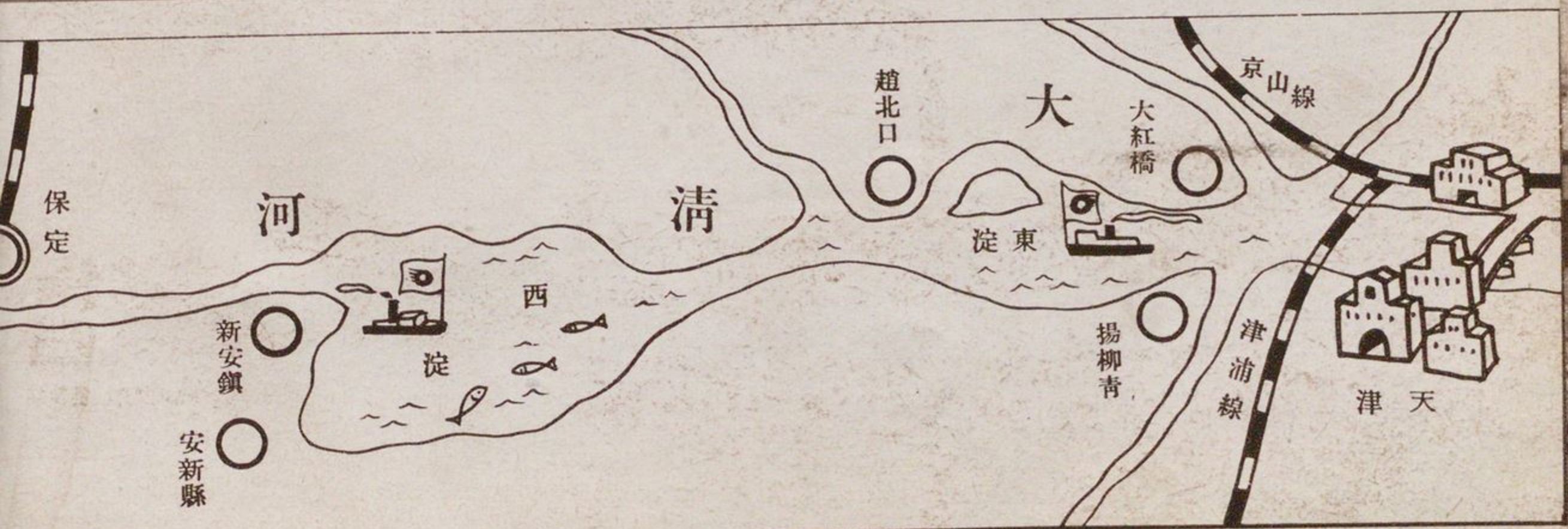
今日この紫禁城は之を故宮と稱び、博

內金水橋

保和殿の大理石階段

紫禁城 3

物館として數區に分つて公開されてゐる。即ち午門は歷史博物館となり、外朝は古物陳列所と云ひ、內廷は故宮博物院と稱してこの大部分を三部に分つて、それぞれ多數の寶物及び諸種の參考資料を陳列觀覽に供してゐる

もと舊宮廷の貴重品の數目は、二十四萬二千五百餘件にのぼると云はれ、三大殿を始め、傳心、文華、更に武英の六殿を全部開放して陳列した時でも、僅かに五千餘件即ち全數の五分の一しか竝べることが出來なかつた。以て東洋の「眠れる獅子」の富が如何に驚くべきものであつたか推して知る可きである

天安門

安新

大清河

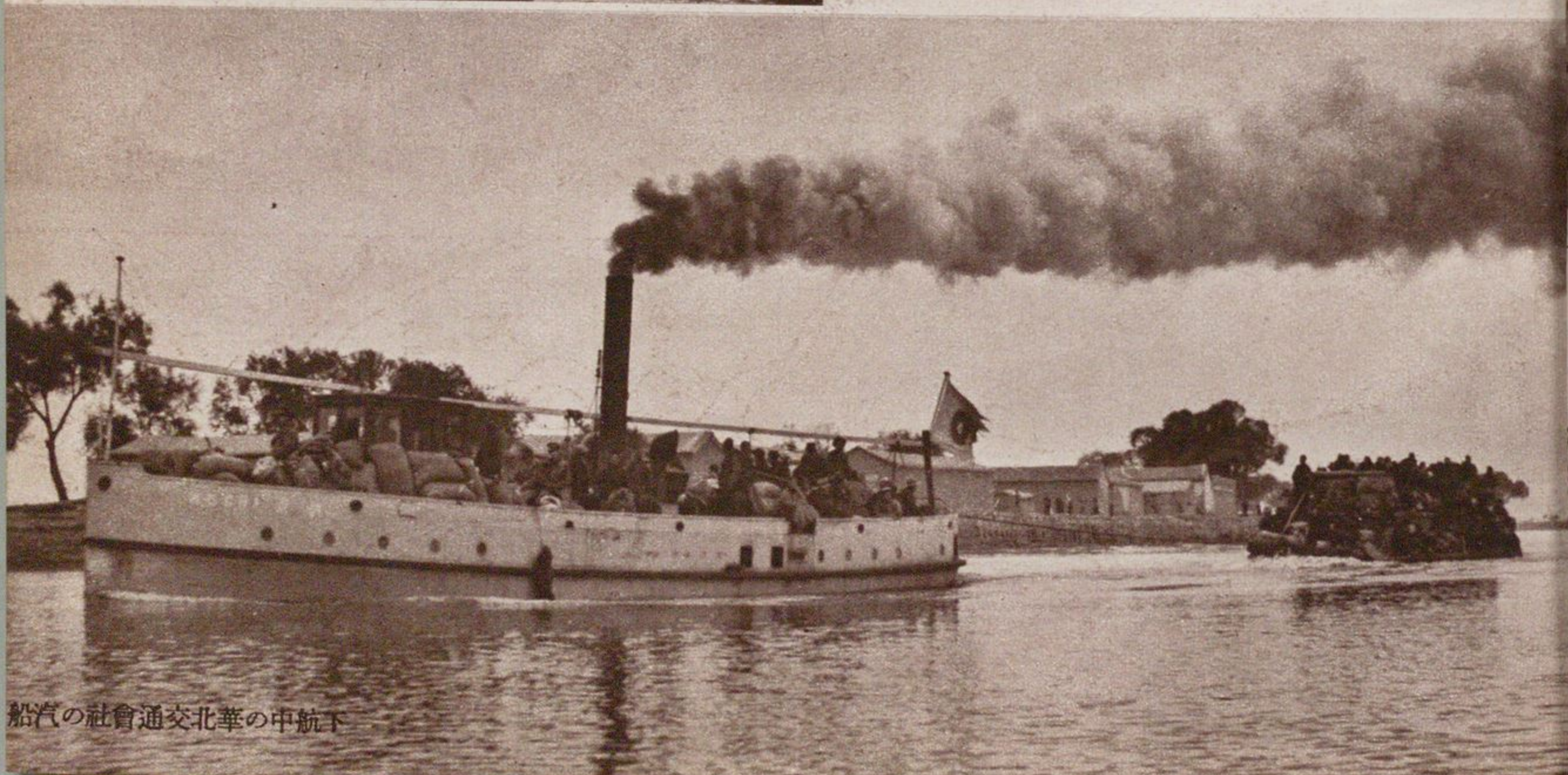
TACHING-HO, THE CANAL BETWEEN TIENTSIN AND PAOTING

支那では「水を治むる者、國を治むる」と云はれて居る様に、その宗教、政治、經濟等悉く治水を離れて考へることは出來ないのである。また中國においては古來水路が國內の交通並に物資輸送の中樞をなしてきた

大清河はその源を八達嶺の山中に發し保定を通つて、河北省北部の沃野を流れ、天津に入つてゐる。保定以東は水利多く六十トン級の民船を通じ沿線各地の棉花や農産物、山西省の石炭などを運搬する重要な水路である。事變以來、敗殘匪の跳梁と一昨年から本年にかけて襲つた大洪水のため、廢河同様濁水の流れるまゝに放置されてゐたのであるが、皇軍の迅速なる匪賊掃蕩と華北交通會社の手による河道の浚渫、堤防の修理等の努力が酬いられ遂に保定――天津間の運營を開始する運びになつた

この大清河航運の開始は山西、河北の物資の出廻りに寄與するところ大であらう。また大清河と共に子牙河、南運河、薊運河、小清河等が已に開航され治水工事も進められてゐる

帆船櫛比する下莊附近

魚莊附近の民船

下航中の華北交通會社の汽船

愛路祭

COMMEMORATION OF RAILWAY PROTECTION

空は秋晴れ…爽涼の驛前から賑かな銅鑼囃子が聞えてきます。今日は北支の農村で一番歡ばれる愛路祭です。愛路祭は愛護村運動の年中行事の一ですから村の老幼男女がわんさ〳〵と押掛けてきます。愛路ポスターをいつぱい貼り繞らした場内には、中央に舞臺が設けられてゐます。驛長さんが司會者となり、先づ村や鐵道の武運長久を祈願します。ついで現地の警備隊長や警務段長、政府代表者などの祝辭や愛路講演があり、集つてきた八十歳以上の老人たちに記念の愛路杖や菓子などを贈る敬老會に移ります。これが終るとこの日の呼物の餘興がはじまります。高脚踊や二輪加、漫才などが次から次と飛び出して、舞臺は俄に鄉土演藝の競演會場に一變してしまひます。一方では施療施藥を受ける患者達が行列をなして續いてをります。紅い夕陽は既に地平線に隱れようとしてゐます。然し場内は歡聲や拍手のどよめきにつれて、胡弓や銅鑼の音がいちだんと冴え渡つてゆくばかりです

標語旗を手にした愛路少年隊

高齢者に杖を贈る

匪討伐の經驗談を聴く

餘興

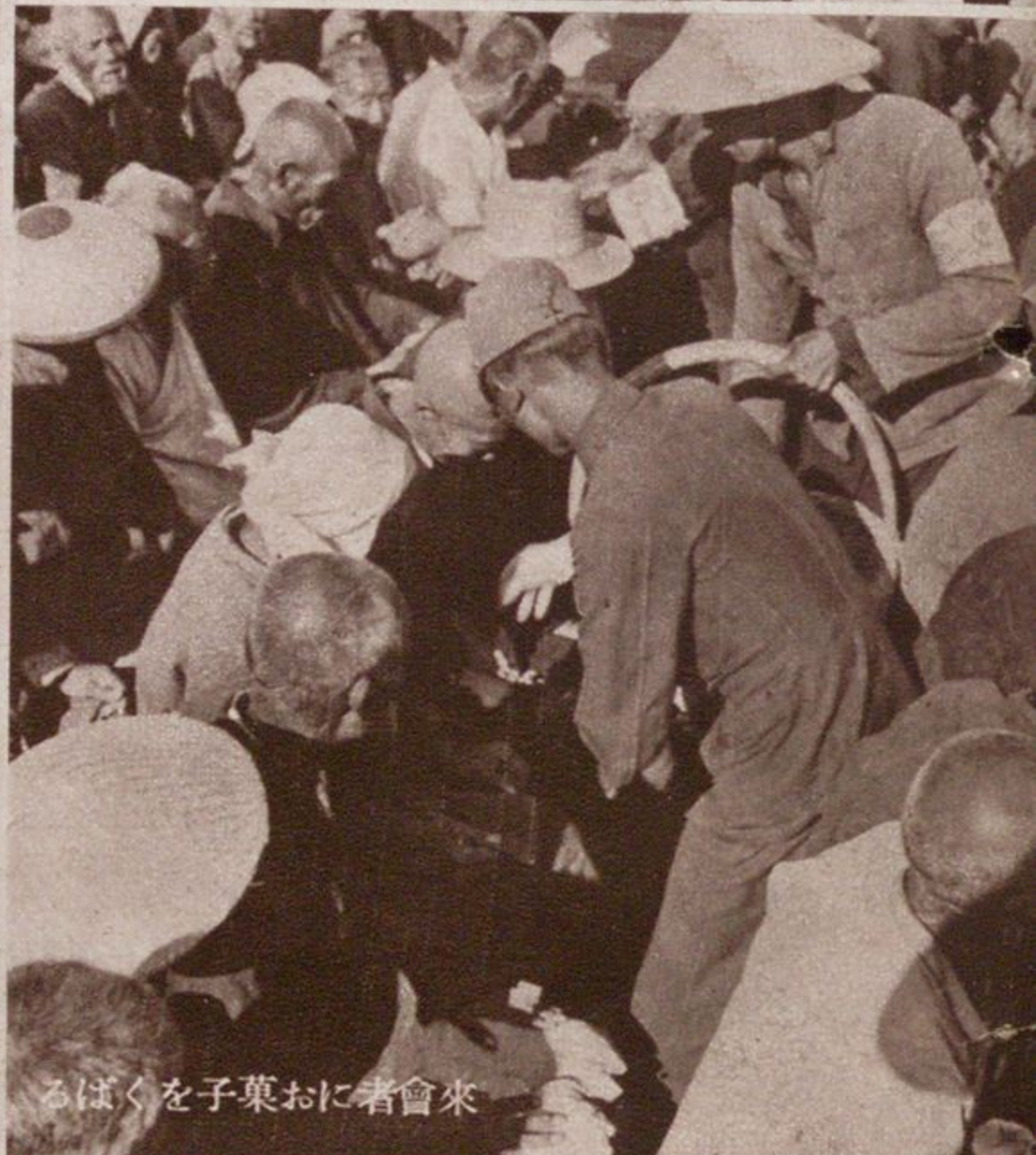
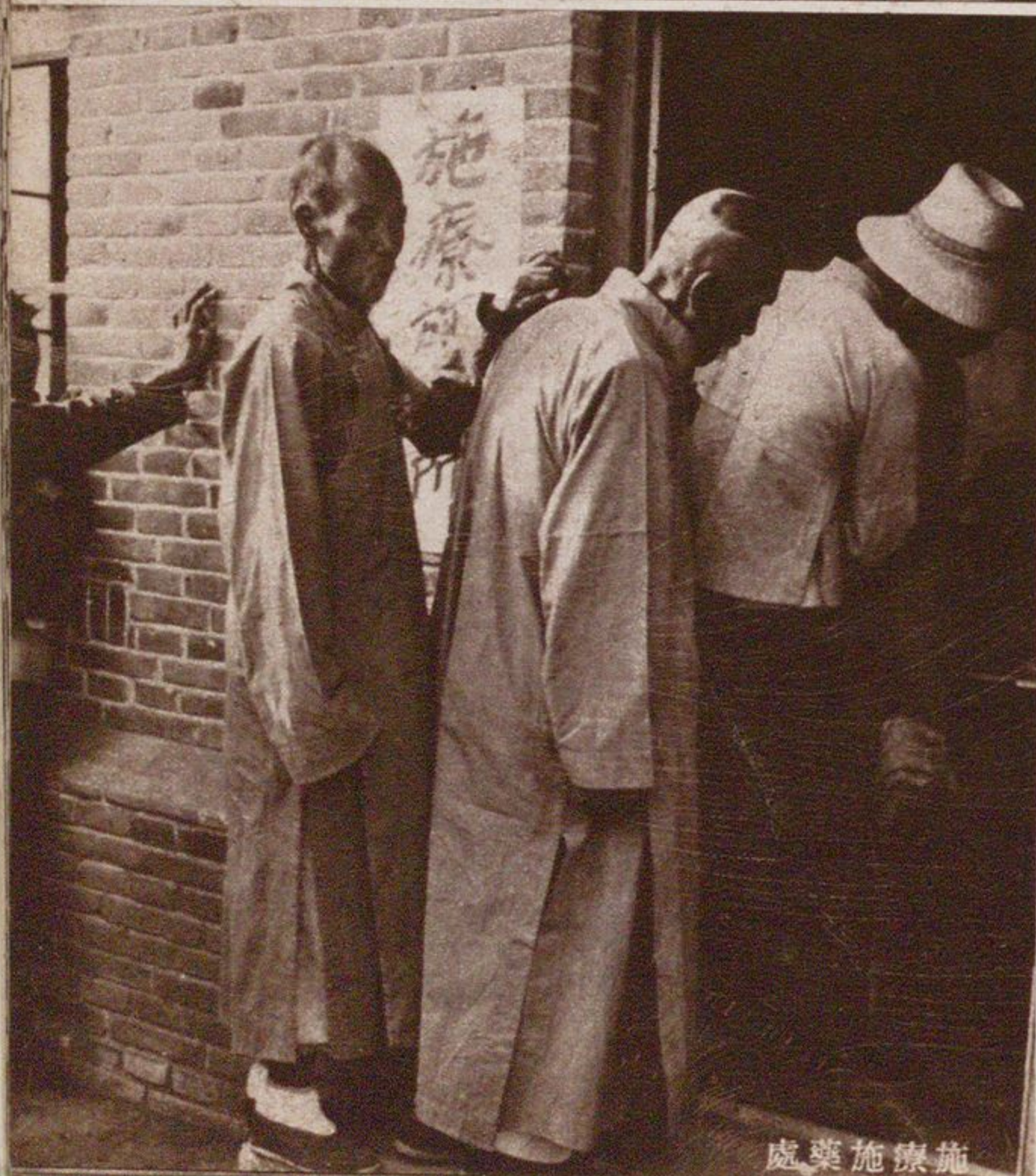
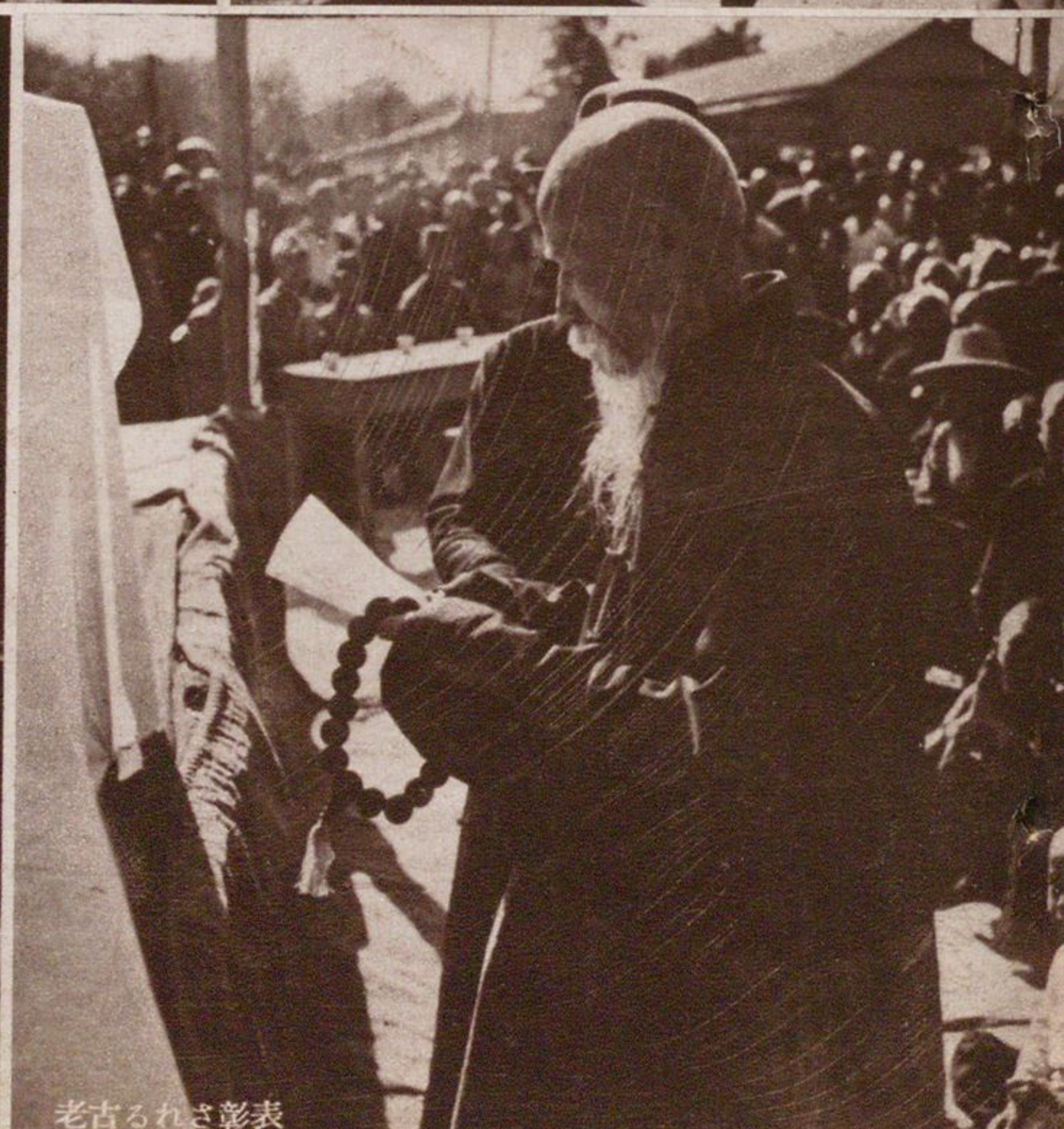
來會者にお菓子をくばる

施療施藥處

表彰される古老

福自天來

中央公園

花墻と窓

支那の民家の土塀の上には、たいてい、巧みに組合せた飾瓦がついてゐる。これを模樣のある墻、花墻と呼んでゐる。戸口や窓の棧も色々變化のある模樣をかたちづくつてゐて面白い

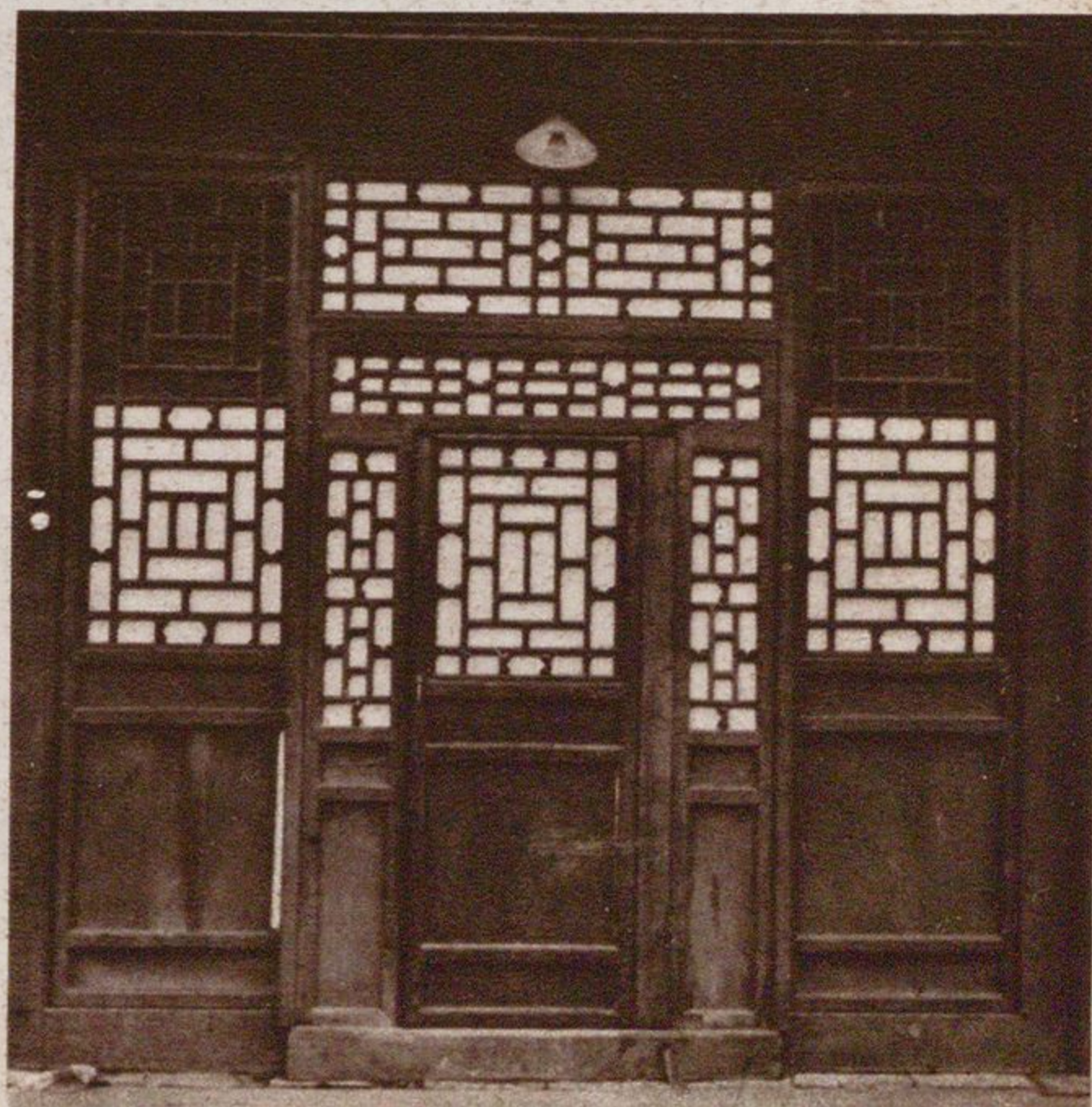
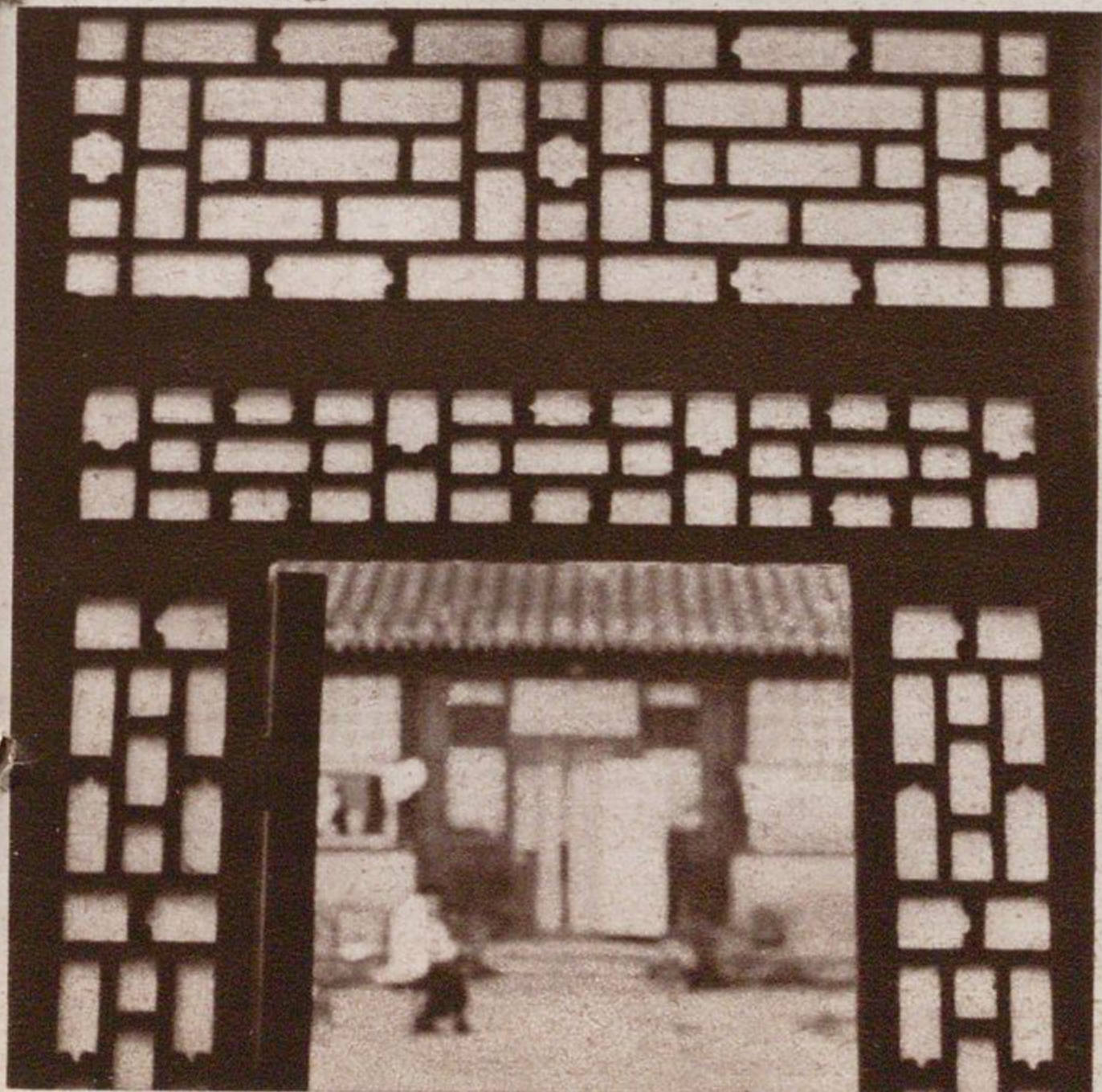
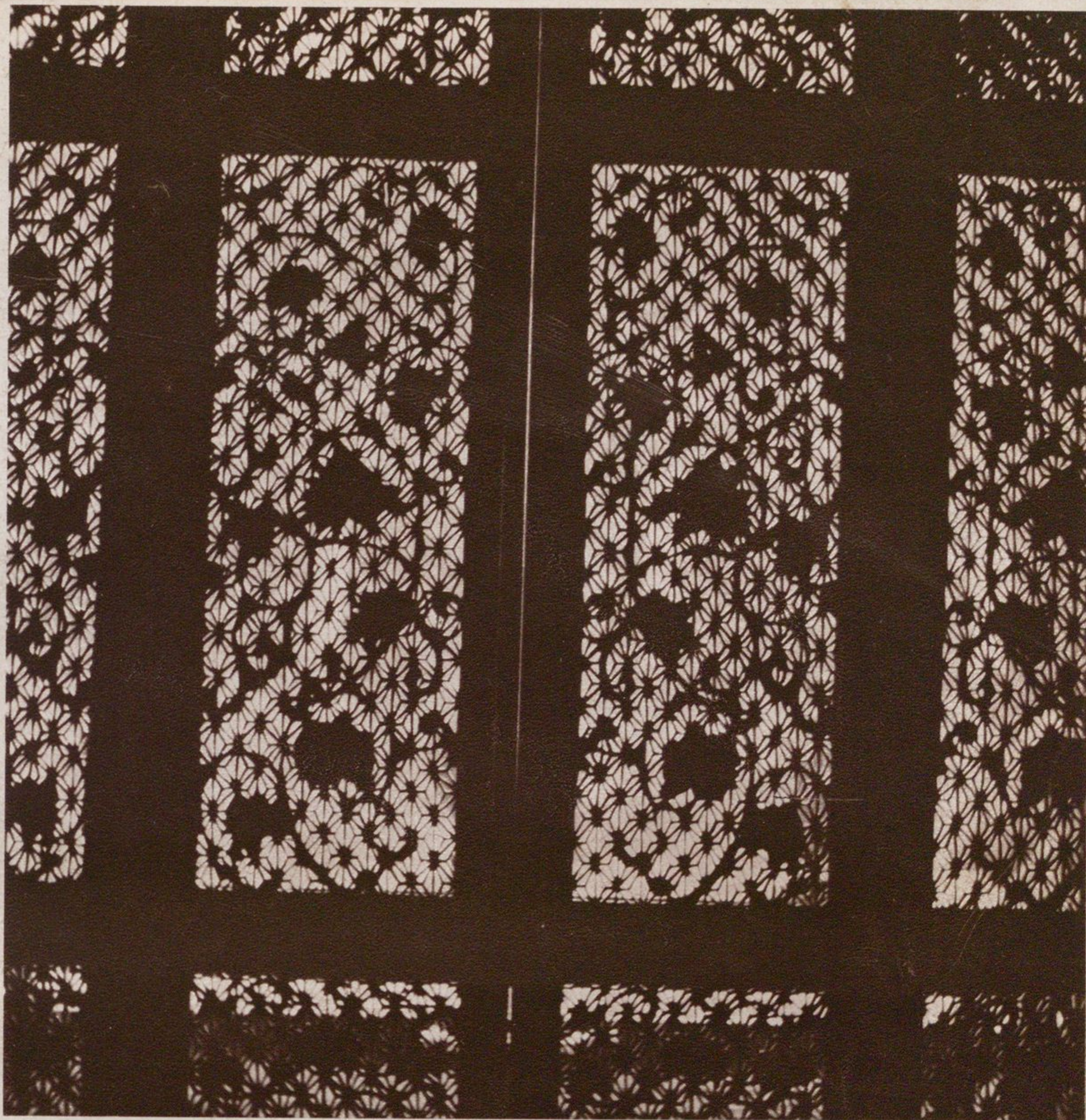
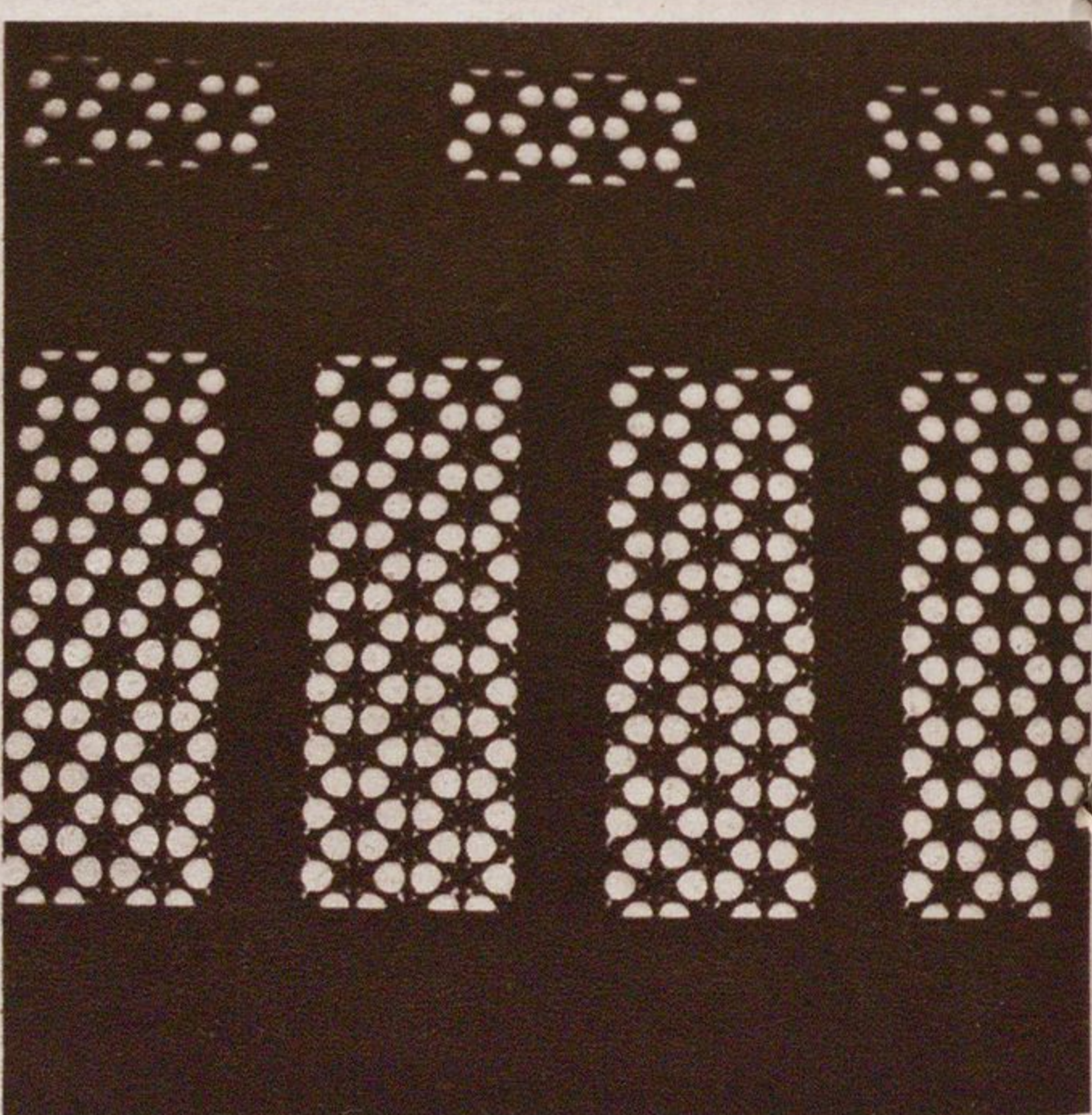
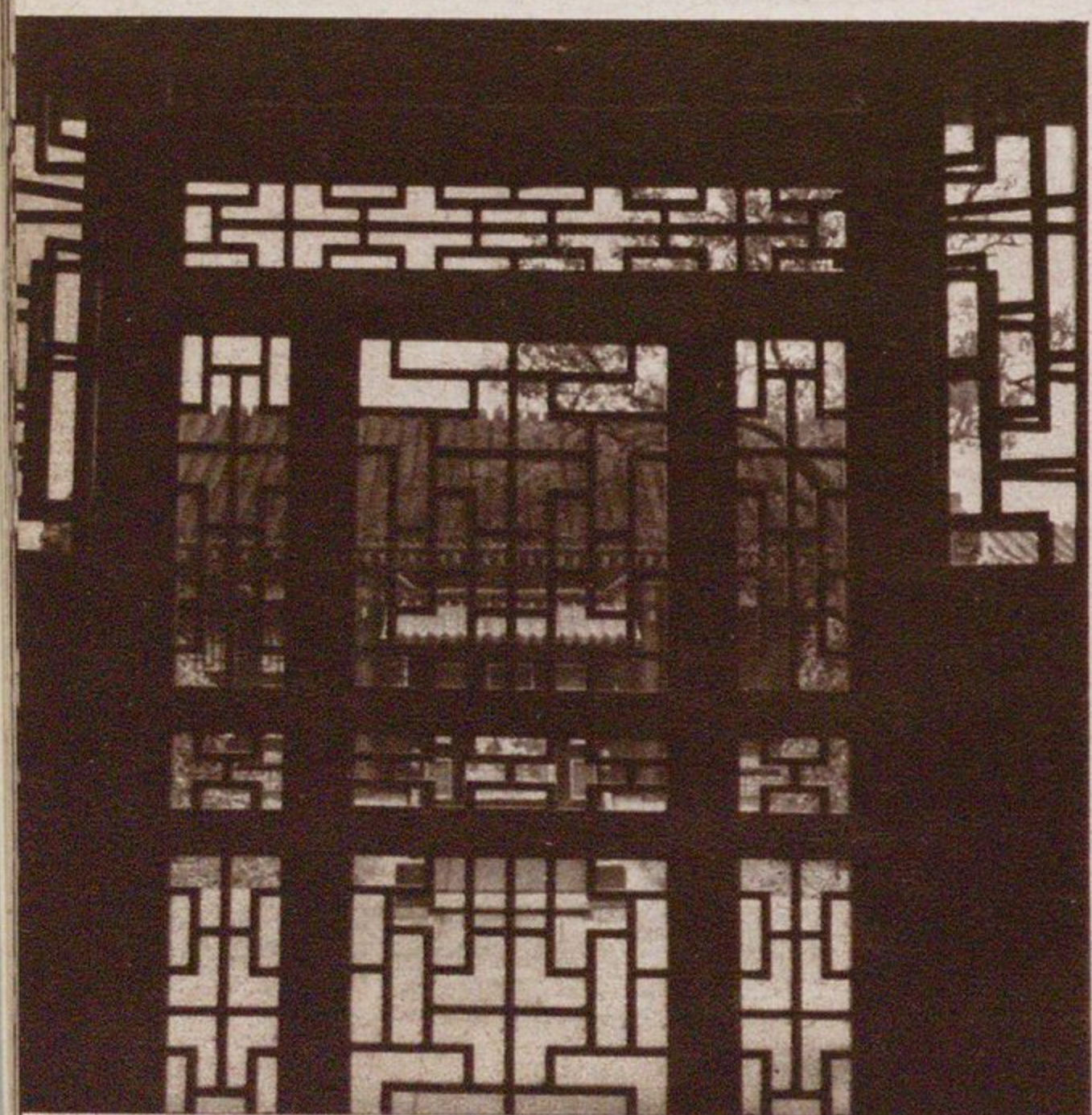
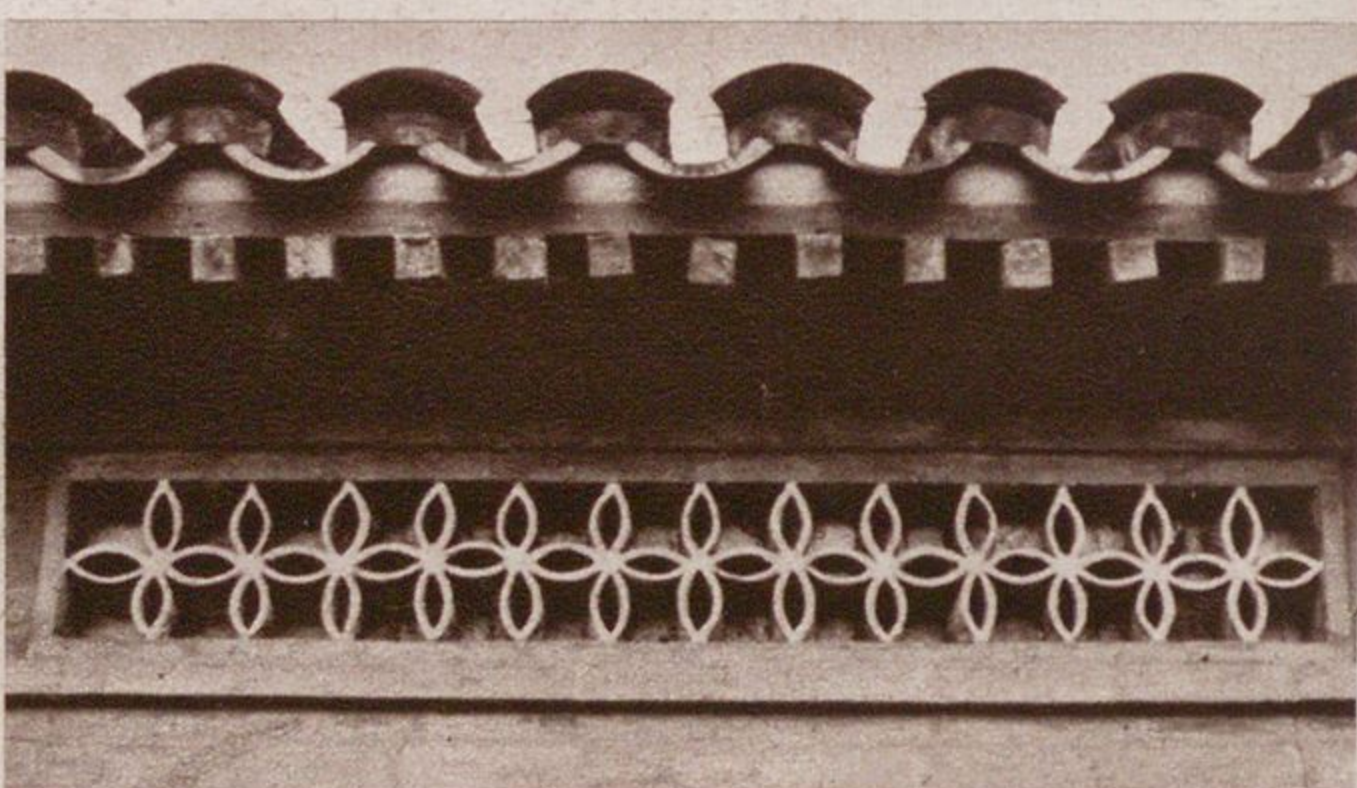
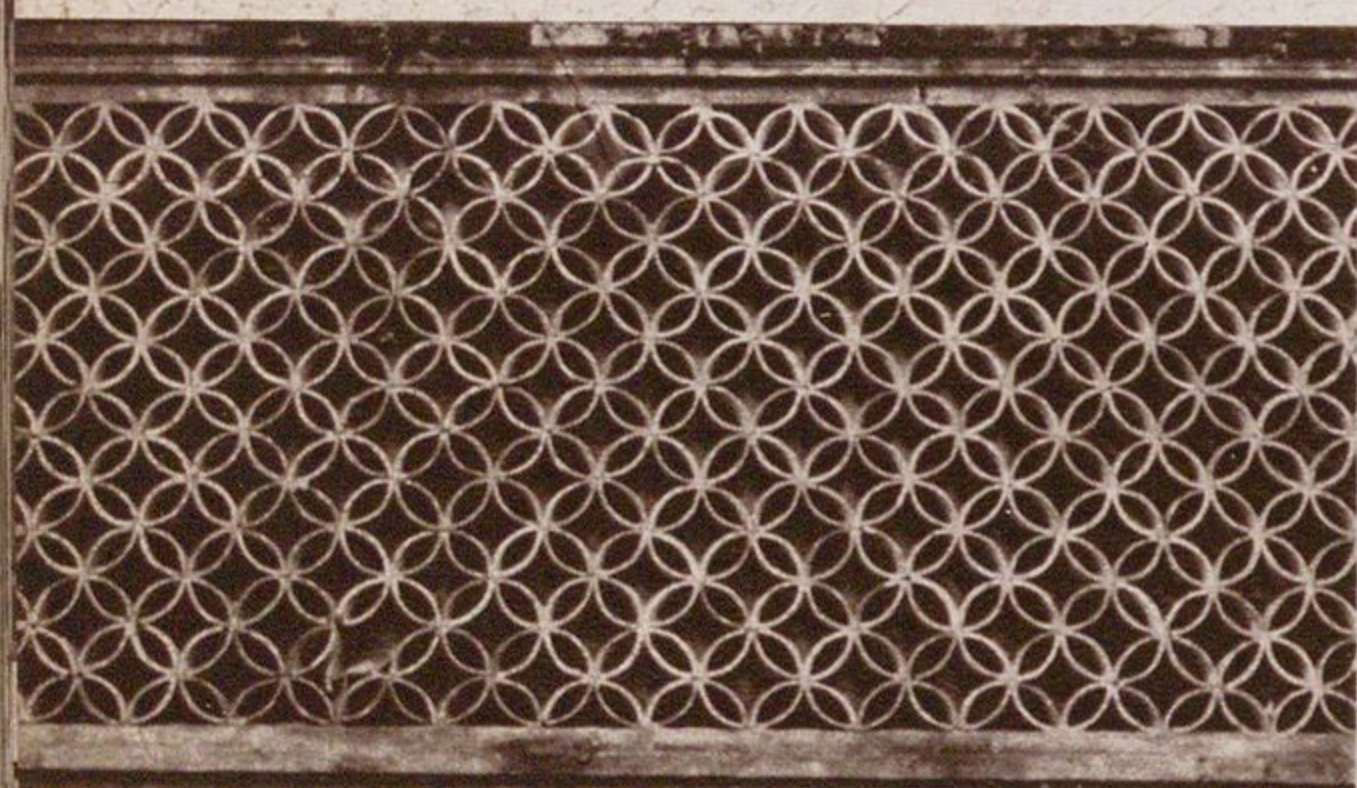
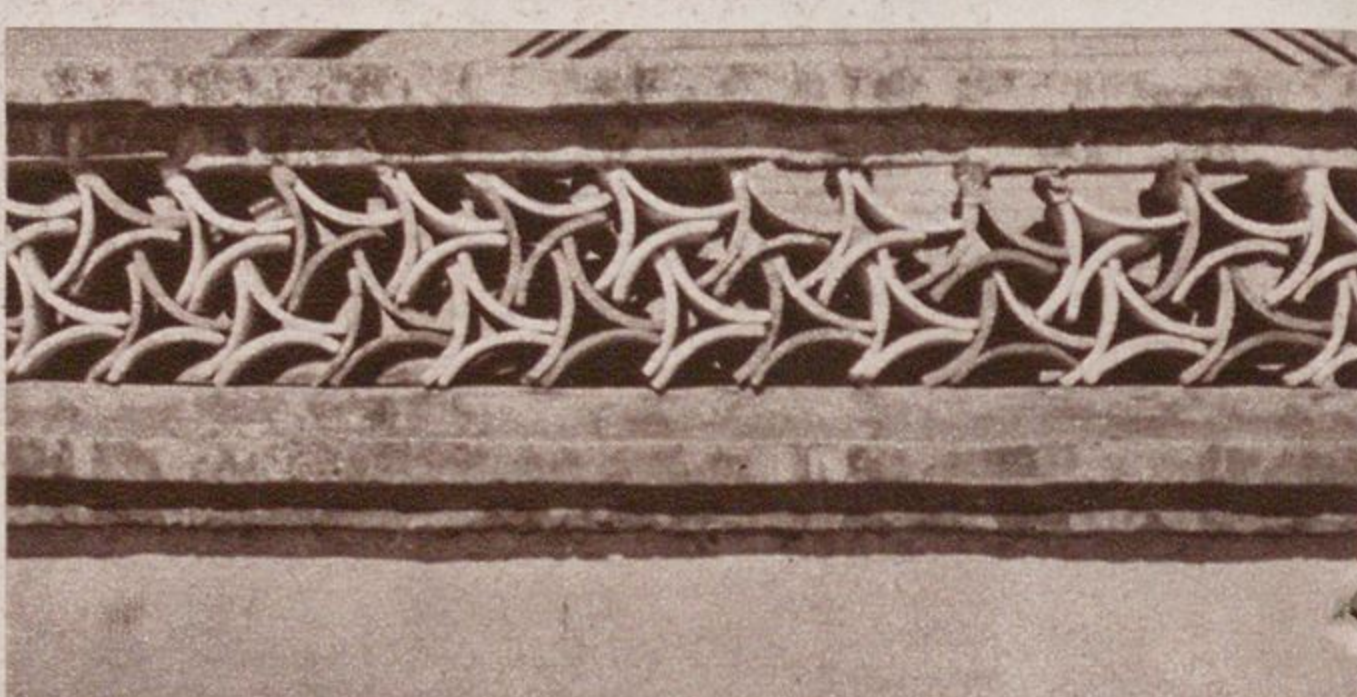
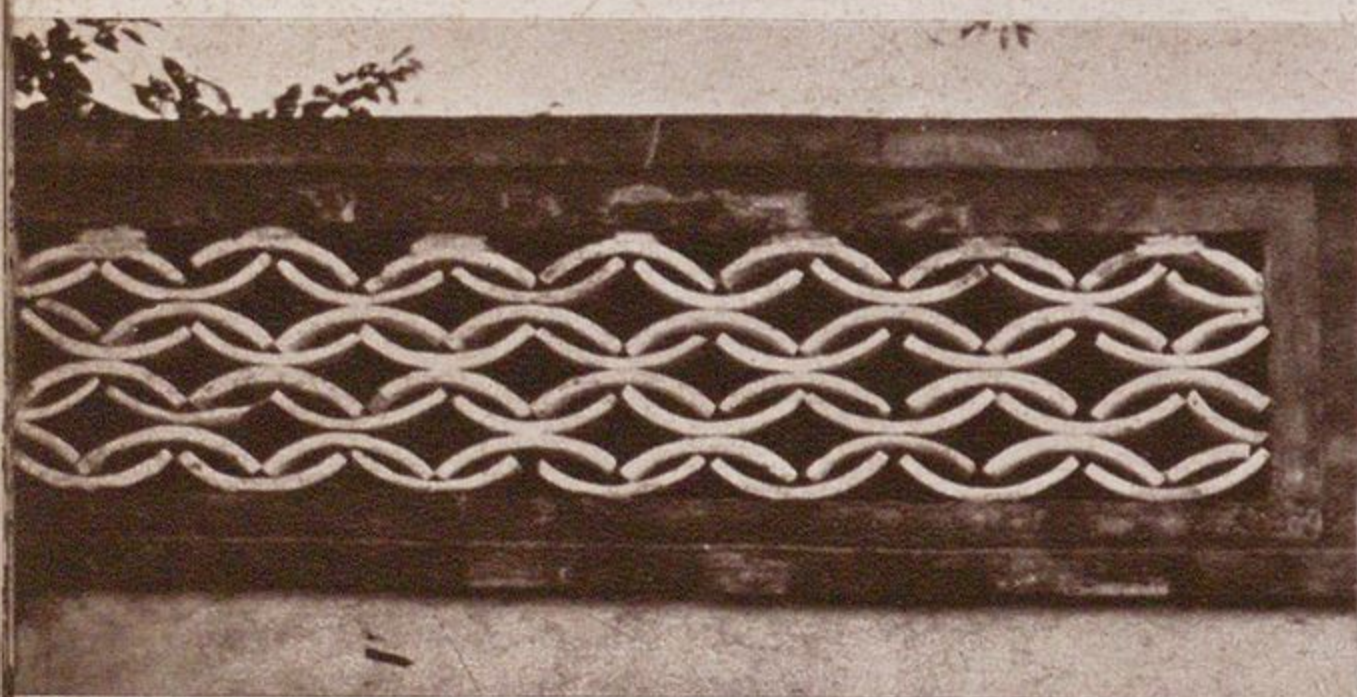
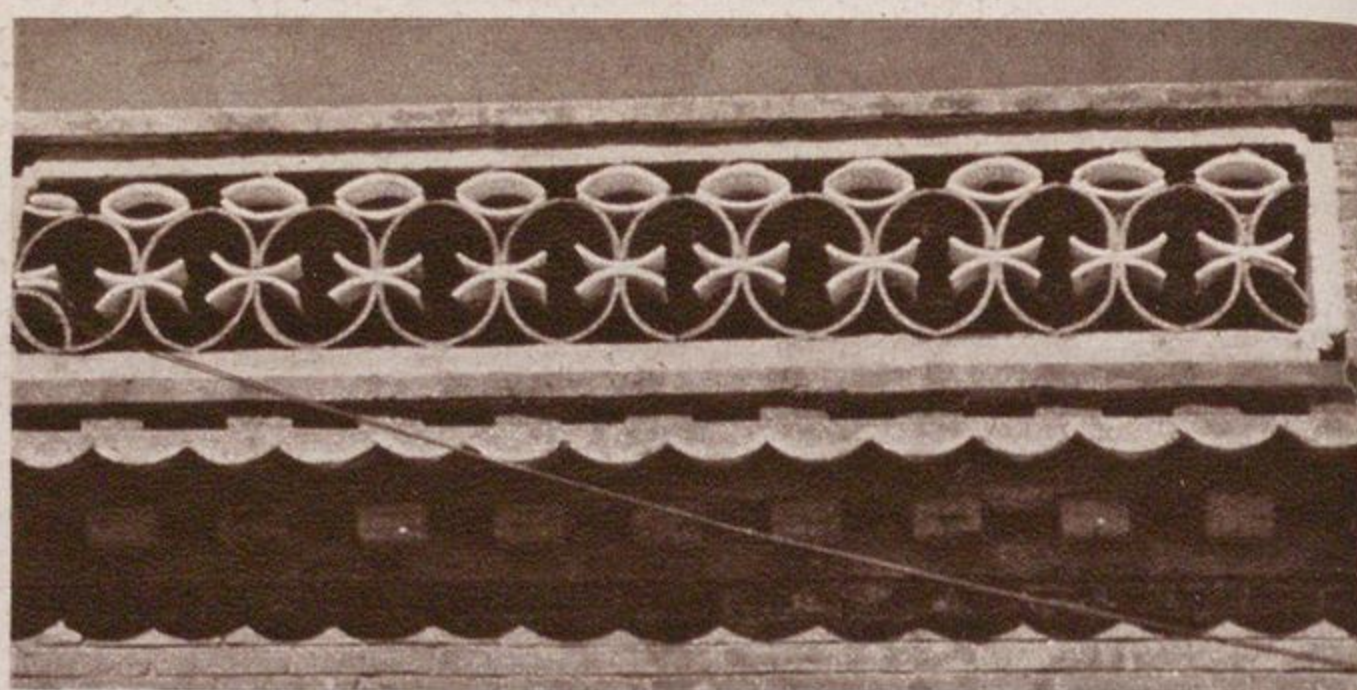
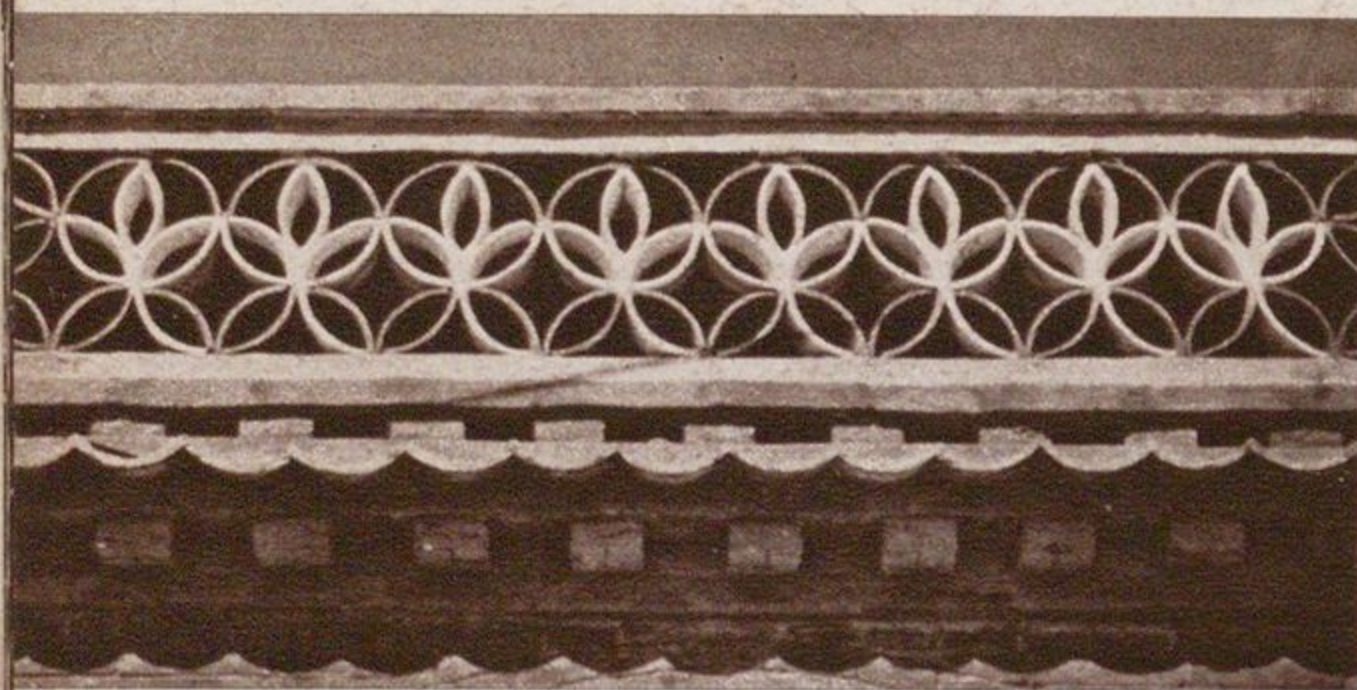
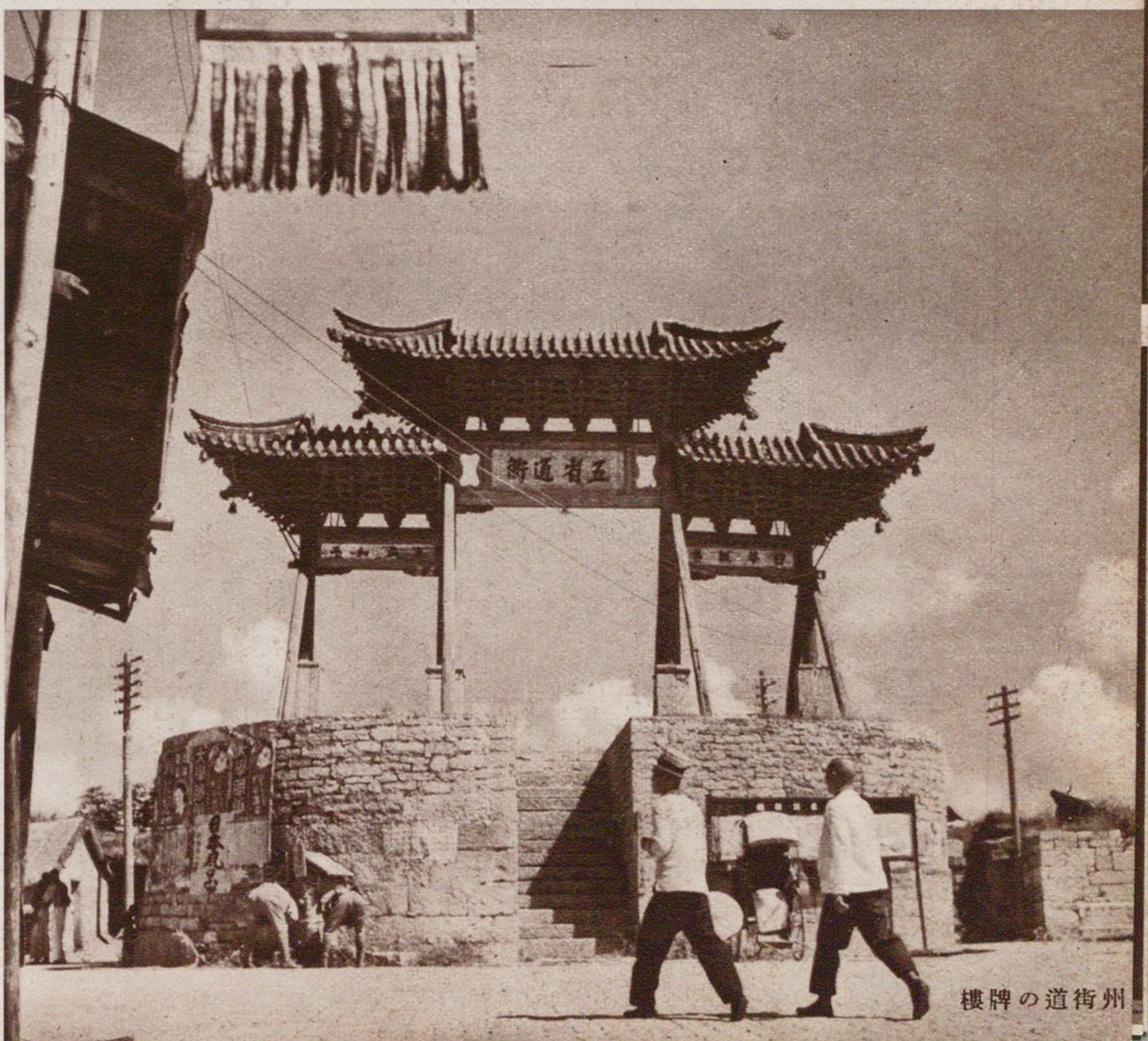
徐州

時計臺

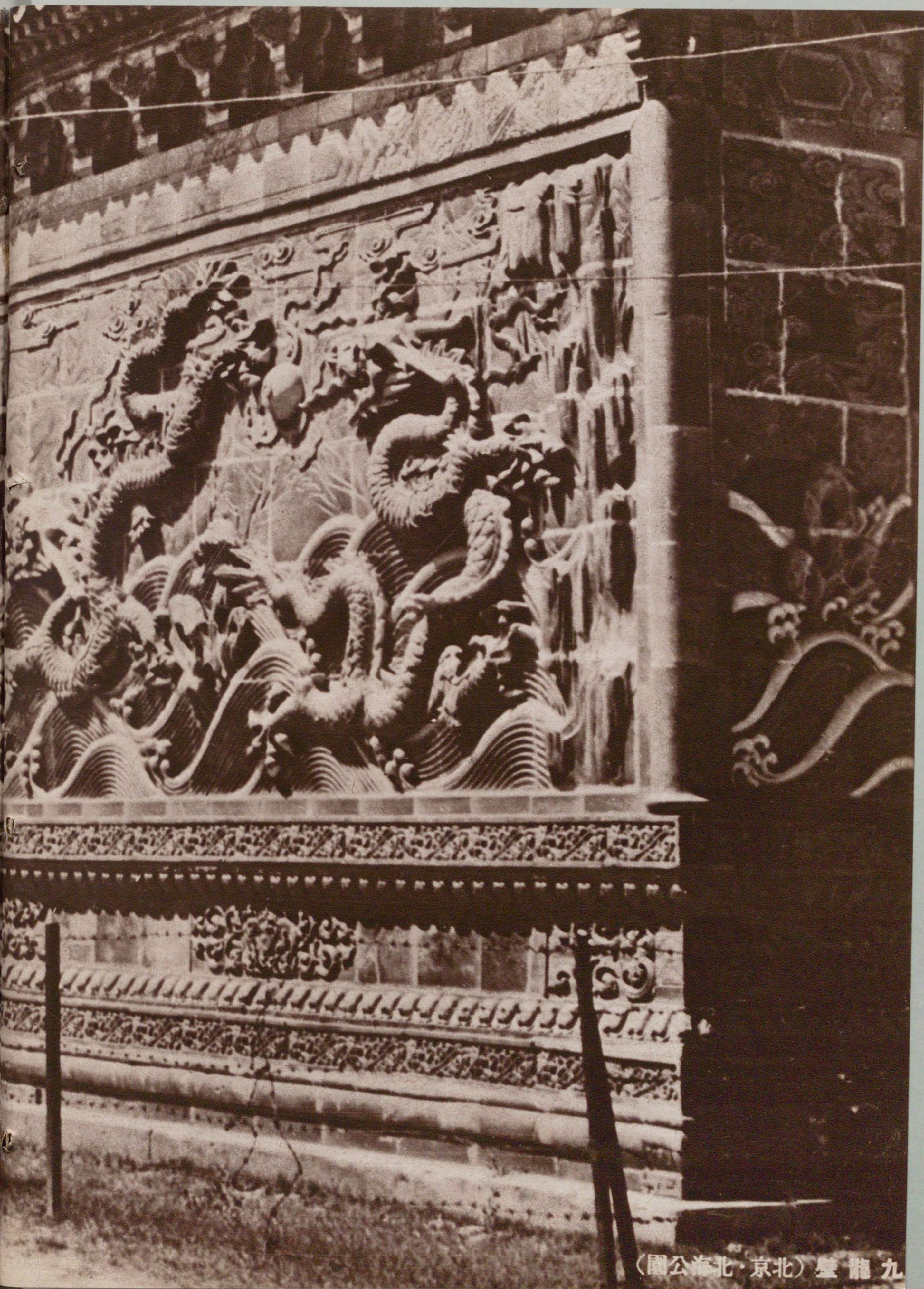
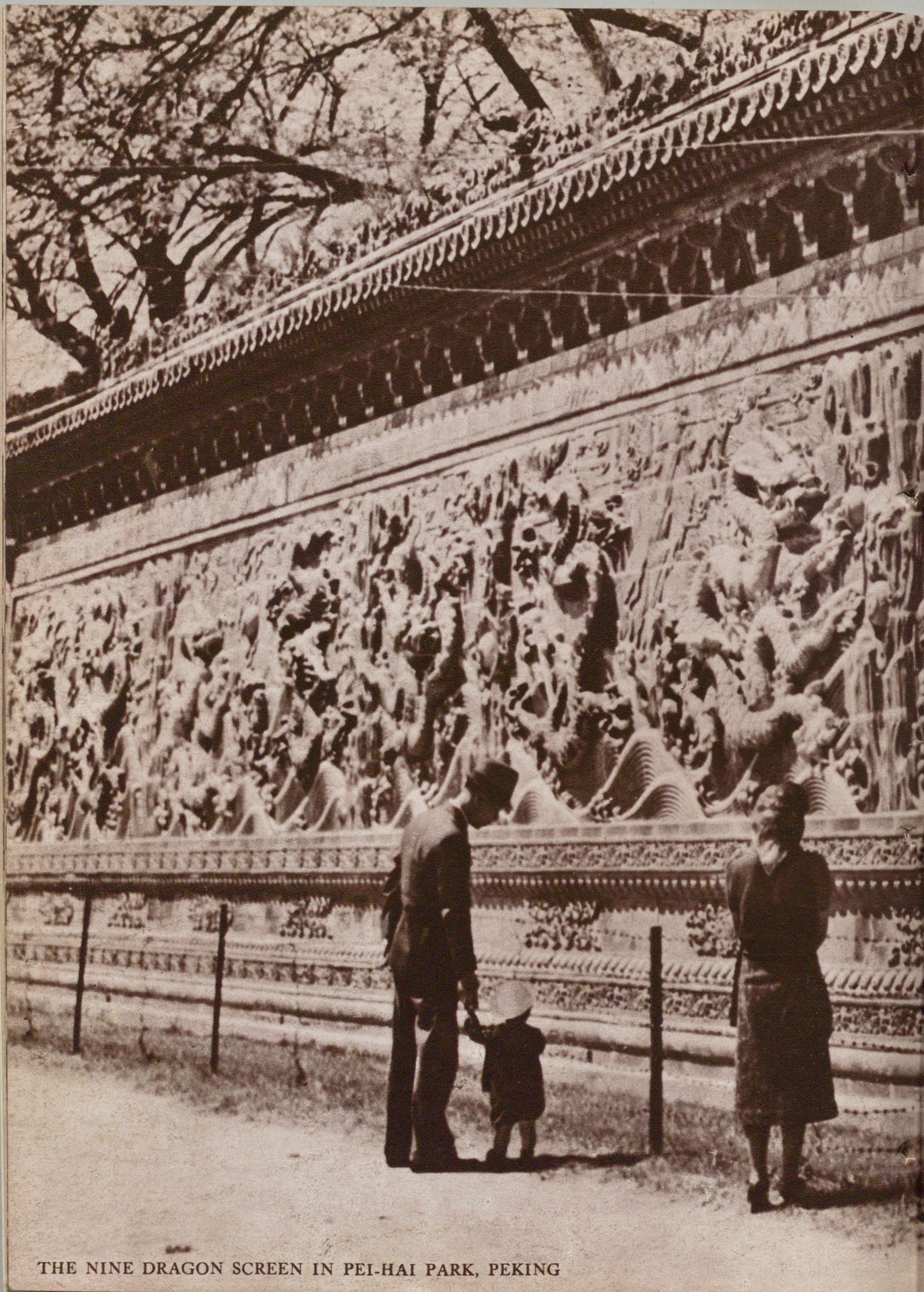
州街道の牌樓

HSUCHOU

快哉公園

城內メーンストリート

徐州は今次事變の激戰地として一躍世界的に有名となつたが、軍事的にはもともと山東、安徽、河南三省の錯綜した省境上の要衝として知られ、古くは春秋時代の宋の彭城で西楚の王項羽が都したところである。近代都市としての歴史は比較的新しく民國十一年（大正十一年）に支那側が自ら開放した所謂自開商埠で、邦人は事變前絶無であつたが現在は三千三百を算してゐる

穀物類、落花生、豆油、石炭等が相當量出廻り、地方物資の集散地となつてゐるが、交通に惠まれて將來は洋々たるものがある。即ち支那南北を縱貫する津浦線と、東西橫斷の隴海線の交叉連絡地點として重視されてゐる。津浦線は昨年四月、隴海線東部（開封――連雲）は同十月何れも軍及び華北交通會社によつて開通したが、更に隴海線西部が開通した曉には愈々その重要性を加へるであらう

九龍壁（北京・北海公園）

THE NINE DRAGON SCREEN IN PEI-HAI PARK, PEKING

歳末と元旦

CHINESE YEAR-END AND NEW YEAR

坊や、坊やは、泣くんぢやない
臘八過ぎたら、黒豚殺そ！
坊や、坊やは慾ばるぢやない
臘八過ぎたら、お正月！

お正月近くになると、子供達の口からこんな歌が聞えて來ます。日本ならば『あといくつねるとお正月……』のやうなものでせう。臘八は陰暦十二月八日で、この日になると一般の家では寒さに中らずまた厄病や災難を免れるやうにと臘八粥（一種の雜炊）を食べます。臘八が過ぎたらどの家でも愈々正月の準備を始めるのです

二十三日は竈祭。竈の神はこの日昇天して人間一年の善惡を天帝に奏上すると云ふので、竈を清掃し竈神の前には糖瓜兒や糖餅（飴で瓜や餅の形に作つた物）などを供へます

二十五日は接玉皇。二十三日に竈の神

鳥にやる臘八粥（北京廣濟寺）

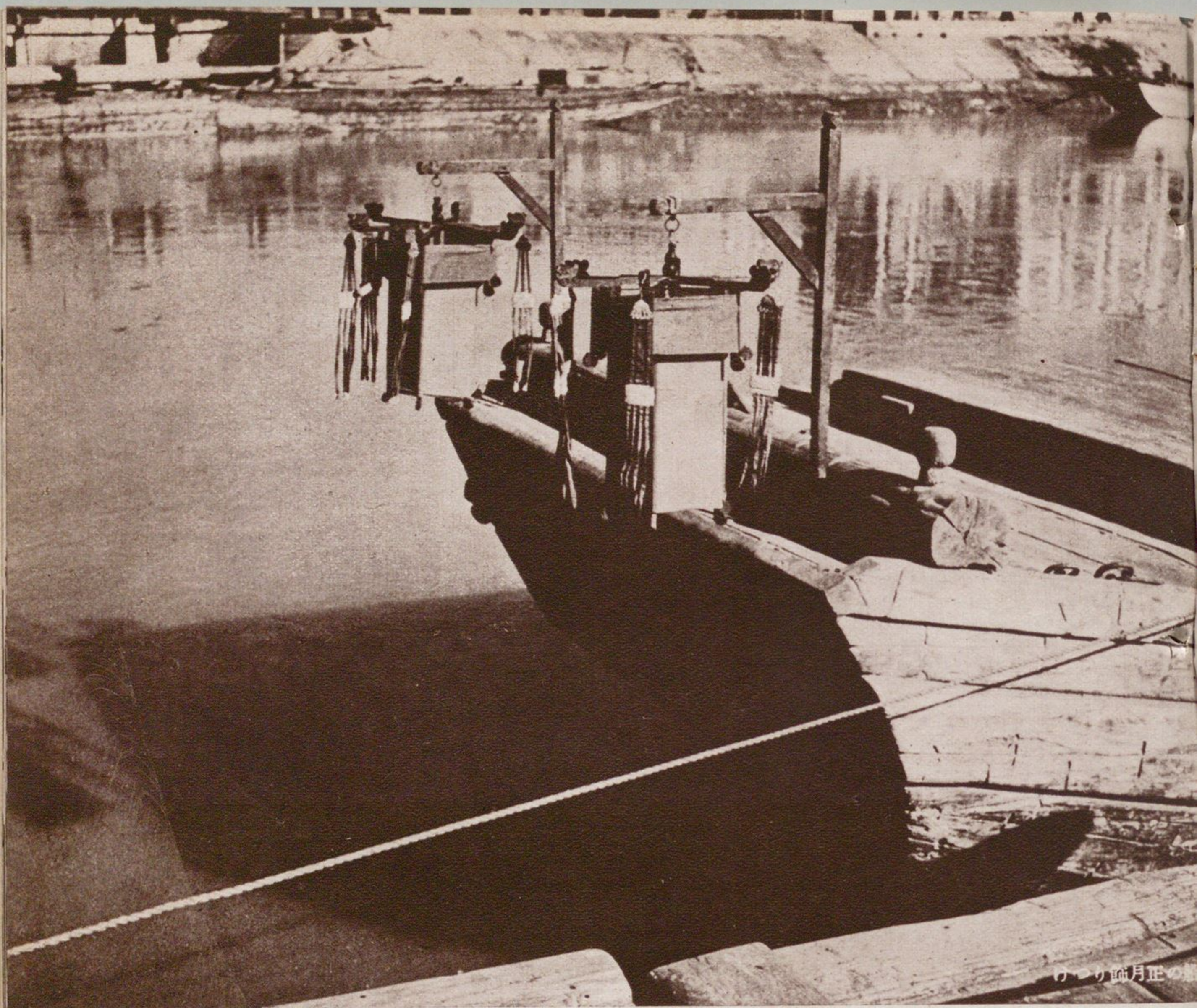
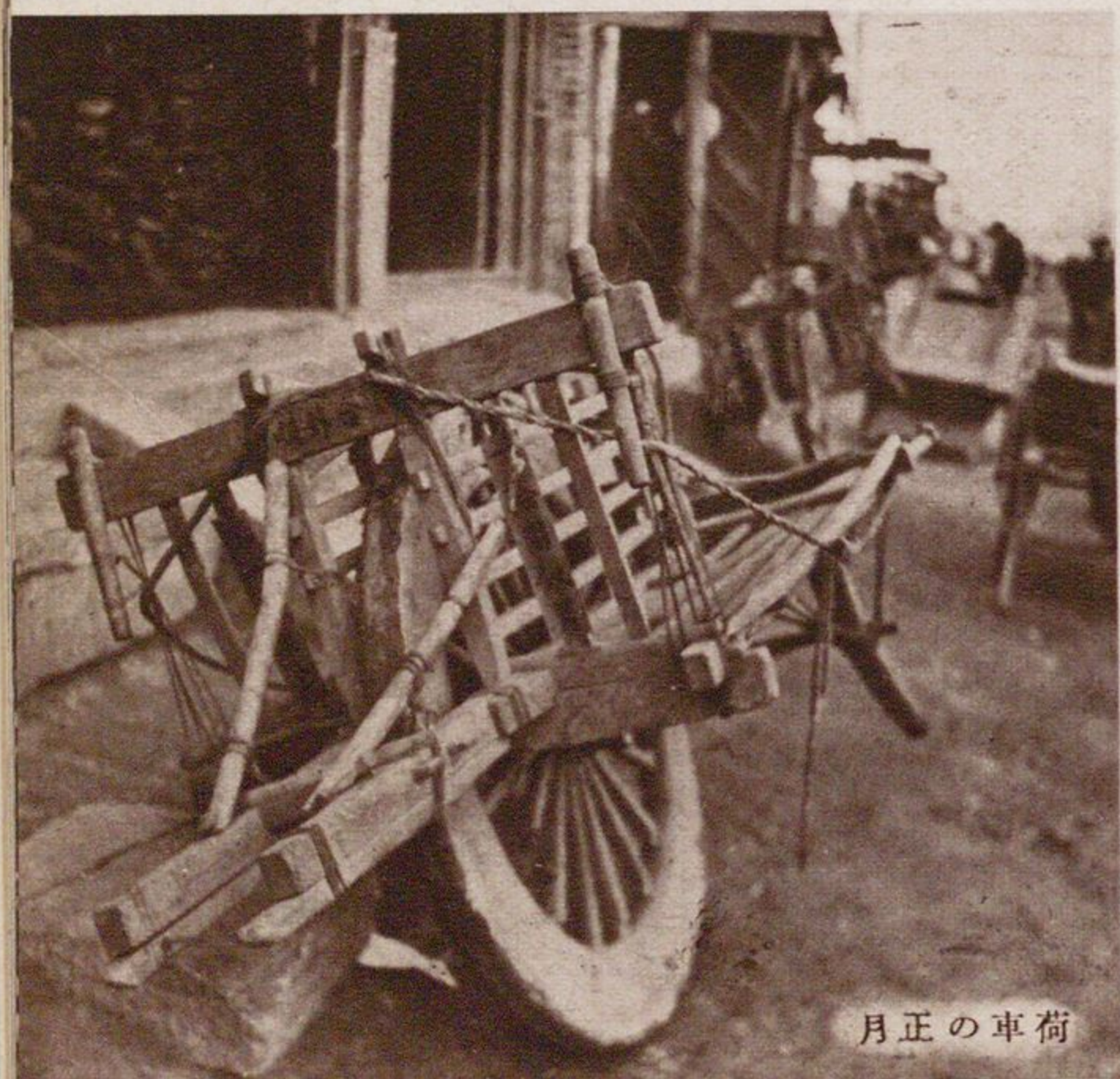
竈神への禮拜

臘八粥を貰ふ貧民達

の正月飾りつけ

荷車の正月

材木屋の正月

歳末と元旦

が昇天し奏上したので、天帝が下界して一年の善悪を判ずると云ふので、この日だけは毎日喧嘩をするやうな家でも、おとなしく物音もしない様に謹愼してゐます。このお祭の前後から年畫（正月用の吉祥繪）春聯（めでたい文句を書いた紅紙）や門神（魔除けの神様を描いたもので門扉に貼る）などの露店が立並び、日本の歳の市と同様に賑ふのです。大晦日になると庭から門にかけて胡麻の殻をまき、中庭に卓を据ゑ、百分（諸神聖賢の全圖を描いた色刷紙）をしつらへ、茶菓や酒肴を供へます。また八仙人の像や、柘榴、元寶などを供へ春聯や門神を貼り換へ、居室に年畫を貼つて夜明けを待つのですが、普通一般の家では寝ないでカルタや麻雀などの遊びをやります

さて夜半を過ぎて元旦になると一家の守護神が

店頭の飾りつけ

紗燈に灯を入れる

一般家庭の祭神

北京・琉璃廠初市の雑沓

北京・白雲觀初詣で――風車見

天上から降臨すると言ふので香を焚き、蠟燭をともして之を迎へ、天地四方を拜し、財神、祖先、門神を祀り一家の者は互ひに新年のめでたい言葉を述べあひ、一家團欒して餃子(肉饅頭)團圓(饅頭)や年糕を食べるのです。佛教信者ならば、早朝第一に前門外の關帝廟や朝陽門外の東嶽廟に詣でるのが慣はしです。二日は財神、八日は順星日のお祭十三日から十七日迄は燈節又は元宵祭と云つて各商店、寺廟、思ひ〳〵の花燈や畫燈を飾つて競ひ、二十五日は大塡倉と云つて穀物屋は倉の神を祀ります。以上の樣にお正月は色々と行事があつて、一年の中でも最も樂しい時でありますから大人も子供も種々と興を盡して遊びます。民國以前には商店などはお正月中店を締切つて、朝から夜中まで銅鑼や太鼓をたゝいて樂しみましたが今では三日乃至五日に短縮されてゐます

風箏（たこ）

CHINESE KITES

日本でも支那でも子供の世界は同じです。お正月近くになると城壁の下の草地や廟の境內、胡同の空地は凧揚げの子供達で一ぱいになります

支那の凧は今から千三百年程前、唐の時代に初めて作られました。然し當時の凧は今の様に子供の玩具ではなく、笛を取附けて樂器に使用されてゐたと云はれてゐます。子供の玩具になつてしまつたのは何時の頃か判りませんが北京の街々に見る支那の凧にはとにかく色彩や圖柄の面白い突飛なものが澤山あります。日本ならば精々うなりをつける位が關の山ですが、支那の凧には蛙や金魚にぐる〳〵目玉の廻る仕掛をしたもの、爆竹をつけて空中で爆發させるもの、二丈三丈もある龍の凧など種々様々です

凧揚げ

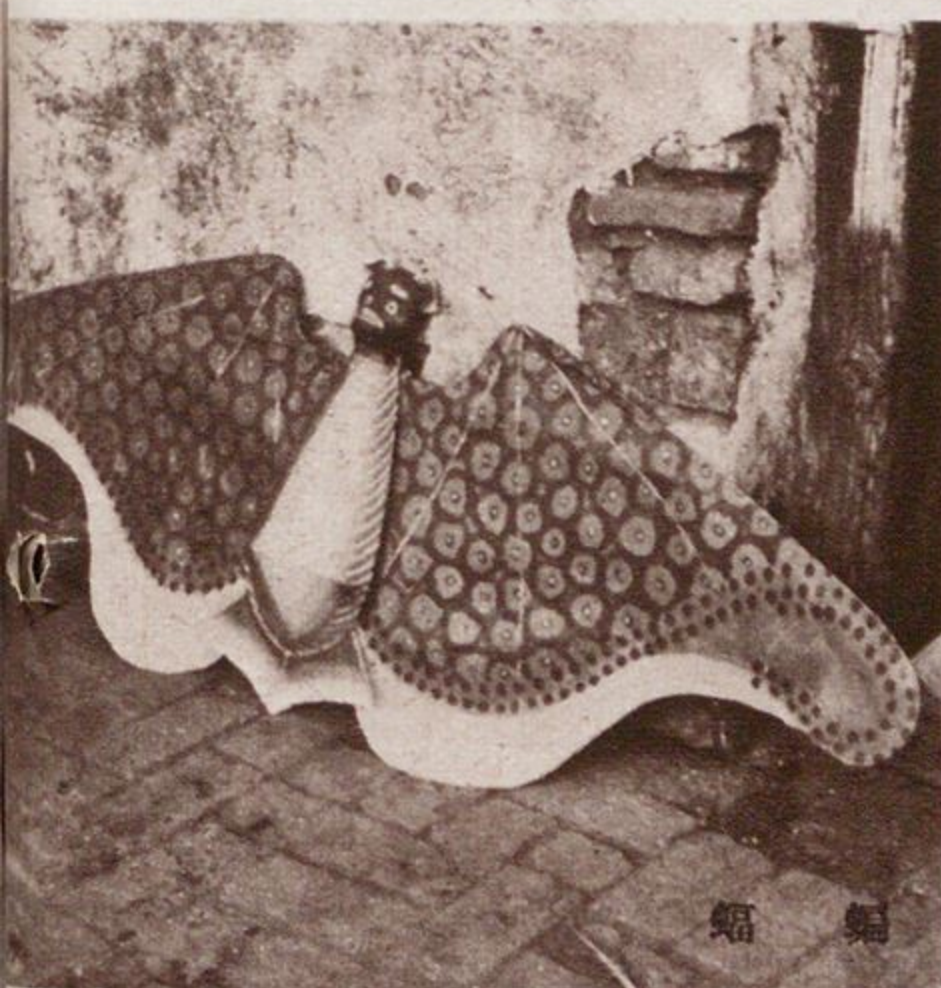
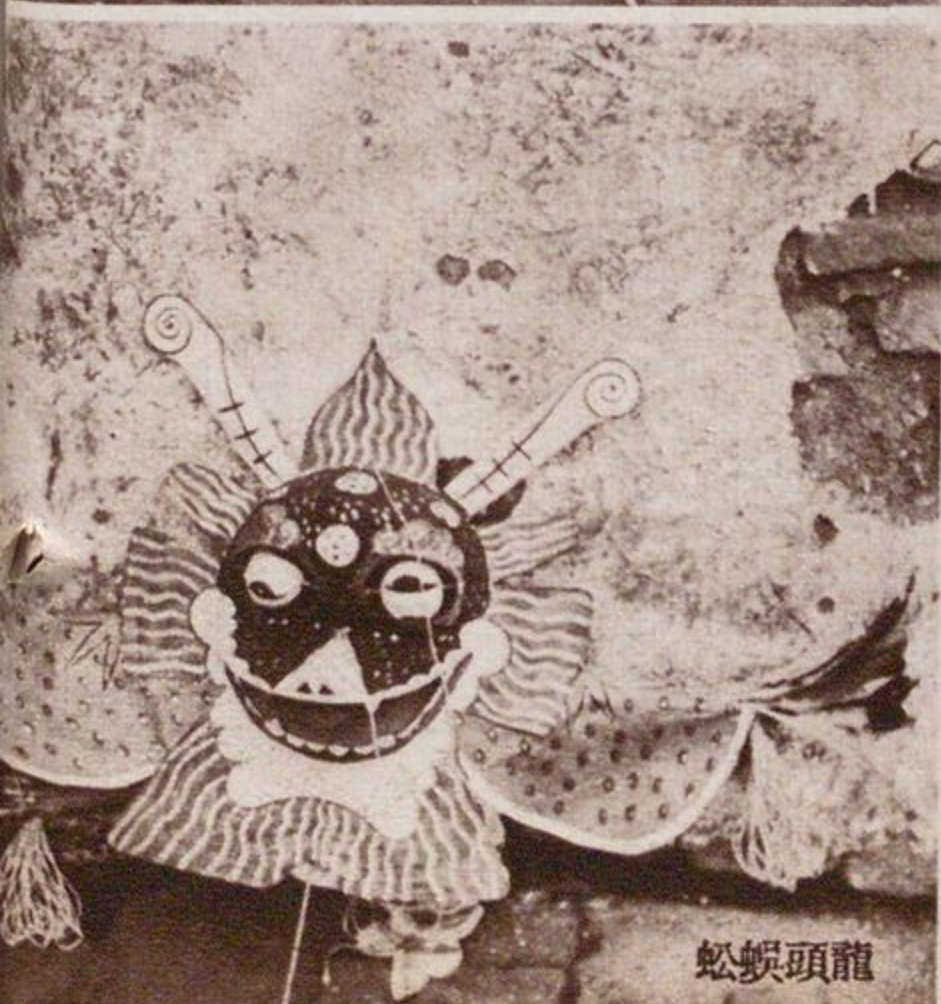
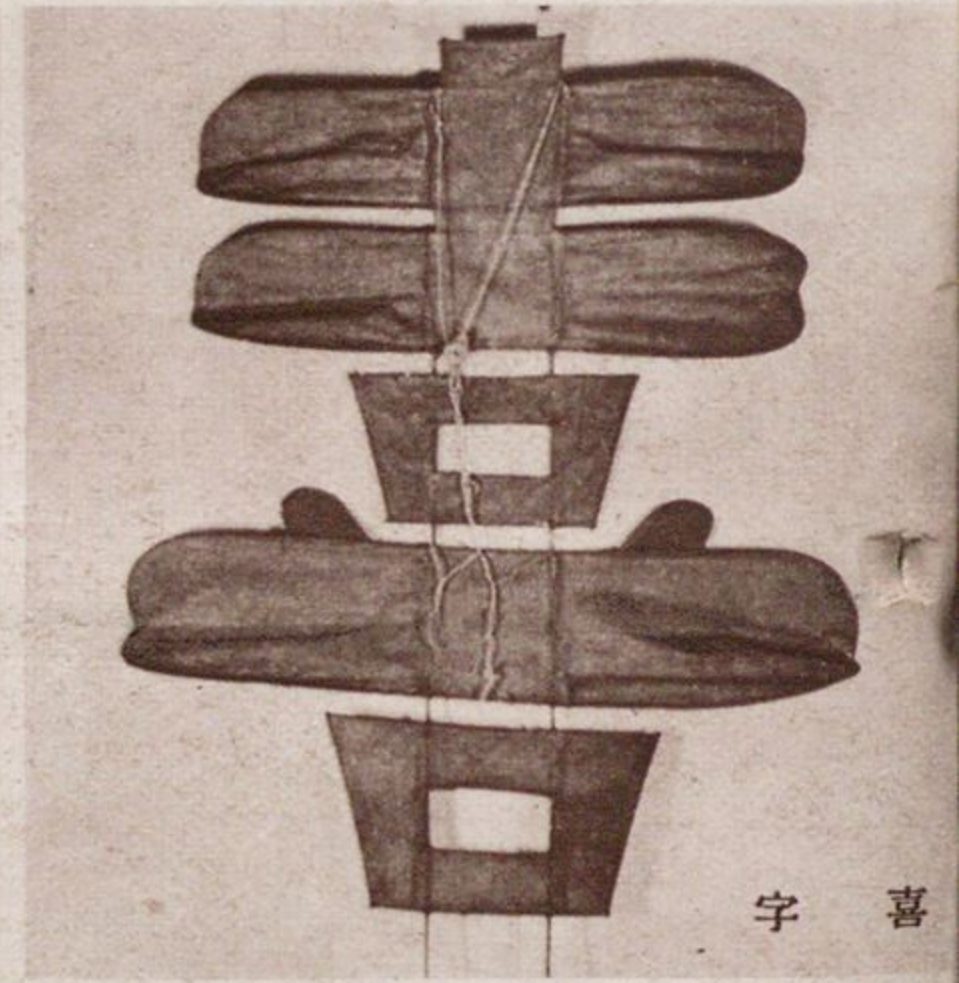
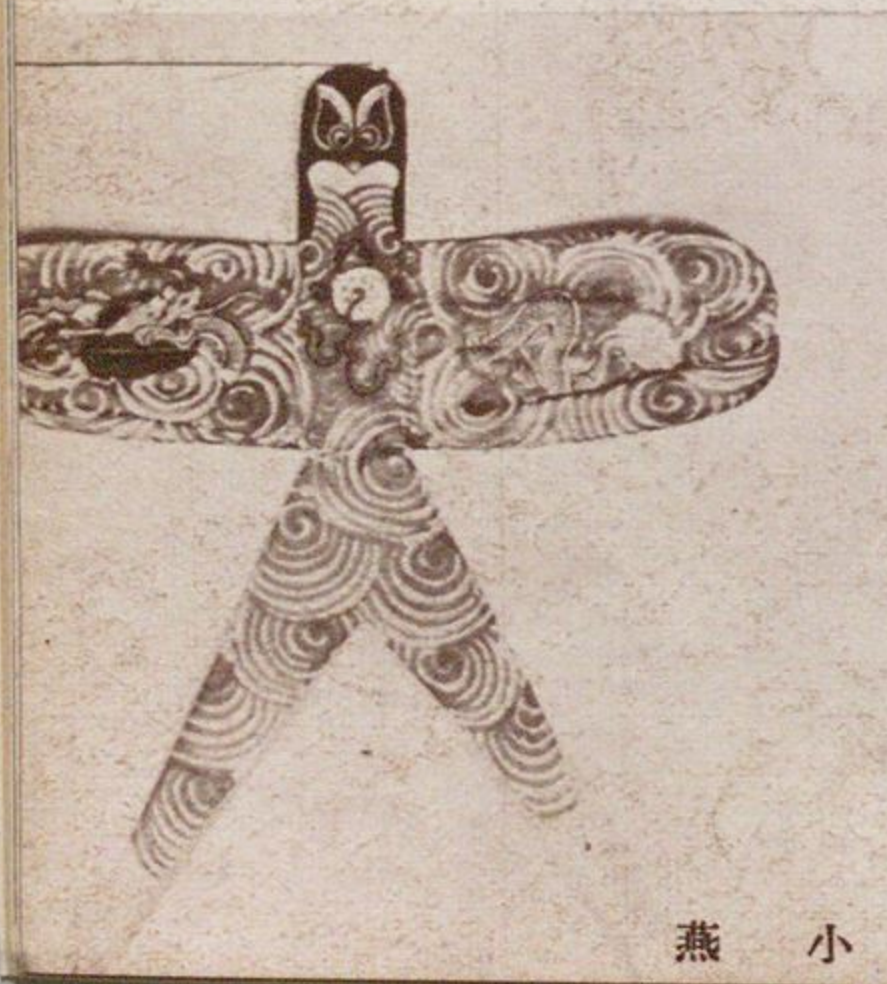
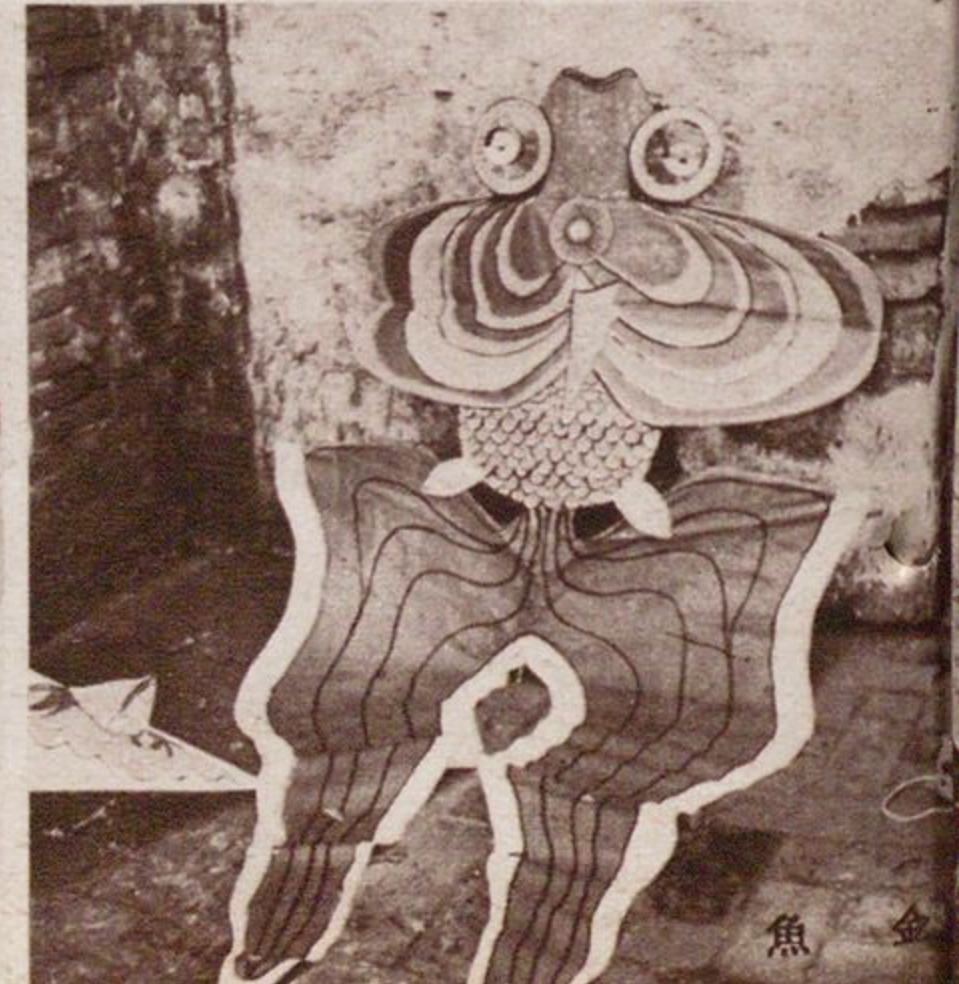
蝙蝠

龍頭蜈蚣

凧屋の店先

五福捧壽
蜻蛉
丹鳳
飛虎
哪吒
孫悟空
二龍戲珠
金魚
喜字
小燕
毛三爺
金魚

MONKEY TRAINER

要猴兒的（さるまはし）

北京の四辻や盛場の人だかりを爪立つて覗いて見ると、大抵手品の類か曲藝師、一人相撲の見せ物です。この中でも一番の愛嬌者はなんと云つても猿芝居でせう。ジヤン、ジヤンと銅鑼がなると、先づ猿廻しの小父さんが歌を唱ひます。歌は支那芝居の一曲で、覇王別姫や孟姜女、日本ならばさしづめおかる勘平といふところでせう。歌が愈々本調子になつて來るとお猿さんは木箱からお面を出して梅蘭芳（支那第一の女形）よろしくへつび り腰で踊ります。歌が武劇になれば大花臉（隈取した芝居の面）を被つて犬に跨り郝壽臣（有名な役者）を氣取ります。支那のお猿さんも日本と同樣犬のお供をつれて大威張です。踊りが終れば次は竿のぼりですが、その前に投錢を哀願します。目をしばたゝき、ちよこなんと叩頭する風情が愛らしく、つい銅錢の二三枚を投げて見たくなります。しかしこの表情も實はお芝居で、金さへ貰へばすぐ元氣になつて竿登りを始めます。つまり支那のお猿さんは隅に置けない商賣上手だと云ふことになります

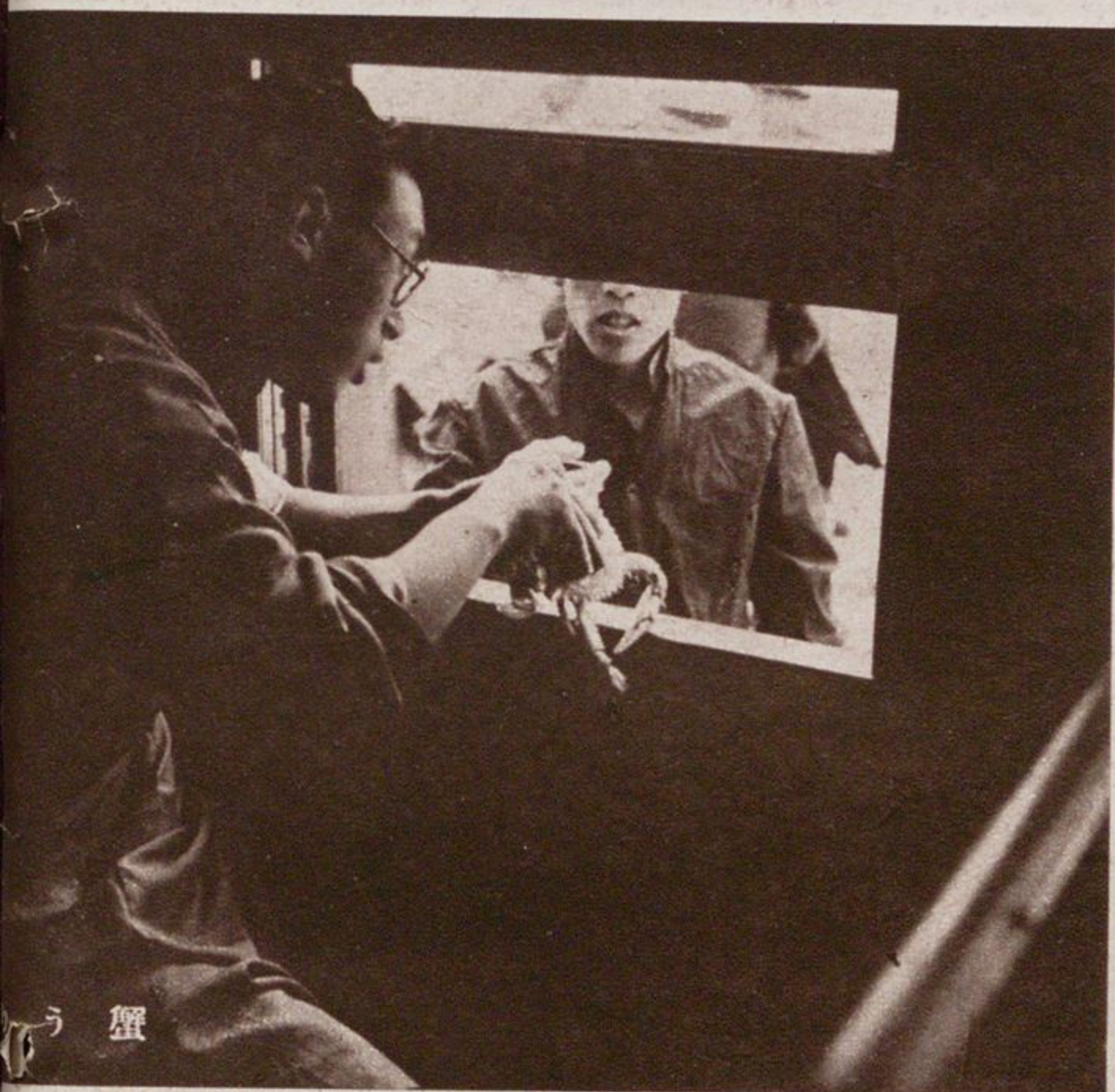
葡萄うり

餛飩うり

燻製の鶏

蟹う

鶏卵うり

果物う

驛賣

STATION HAWKER

北支に汽車が走つたのは明治十九年。立賣りが始つたのもそのころのこと

▽

大きい驛では華北交通會社指定の營業人が驛辨やすしなど賣つてゐるが、小さい驛では「構内營業」などとしかつめらしいことは一切我不關焉で、汽車がつくと驛の近くの百姓家からぢいさん、ばあさん、こどもたちがわれがちに卵から鷄、なつめ、あんずから西瓜まで抱へて賣りに來る

ローカルカラー横溢で旅情とみに慰められる。きうりやなすなど抱へて來るに至つては野趣滿々、買つて歸ると田舍の匂がする

▽

北支、蒙疆では全線各驛で必ず何かを賣つてゐる。大陸の汽車旅行は味覺の點から言へば決して單調平凡ではない

▽

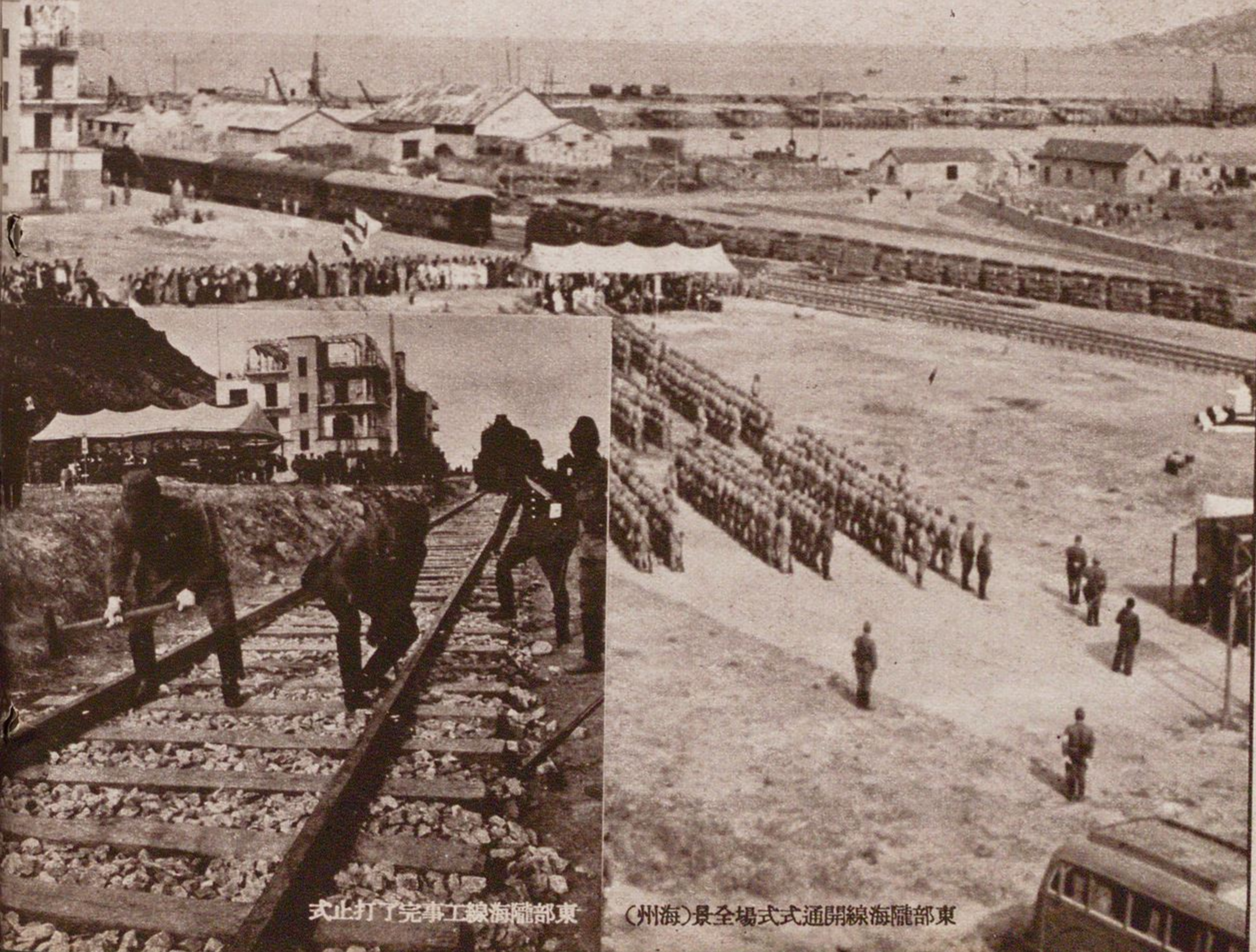
日本に汽車が走りだしたのは明治五年。驛辨が賣られたのは明治十年ごろ。元祖は大阪である

驛辨の大陸進出は六十三年の驛辨歷史に特筆さるべきであらう

大きな歴史・小さな歴史

支那中部を横斷して海に通ずる隴海線は江蘇省の連雲港と陝西省の寶鷄を結んで、蜿蜒一千二百三十三キロに達し、政治、經濟、文化の大動脈線である。今次事變に際し、暴戻な蔣介石軍のために、その徐州以東は破壞の限りを盡されたが、我が皇軍部隊では昨年一月十五日、これが再建工事に着手し約十ケ月の苦鬪の結果、さしもの難工事を克服、十月二十八日、連雲港において晴れの全通式が擧行された。この日、吹き鳴らすラツパの音に皇居遙拜をしたのち、〇〇司令官、靑村部隊長の打止式が行はれ、多田司令官代理の告辭朗讀、佐原華北交通會社理事の祝辭などがあつて、めでたく歷史的の式を終つた。これに伴ひ漸次東方に伸長されつゝあつた華北交通會社の營業線も連雲港まで通じ、開封――連雲間五〇〇・二キロが營業されることゝなつた

東部隴海線開通式式場全景（海州）

東部隴海線工事完了打止式

▽「千年の古都北京に對して近代文化の新都北京を建設しよう」と臨時政府建設總署では北京都城の西郊に二十五萬人を抱擁する約六十五平方キロの新地建設工事にとりかゝつた。このため北京内城から西郊新市街に通ずる城壁は既に開鑿に着手された

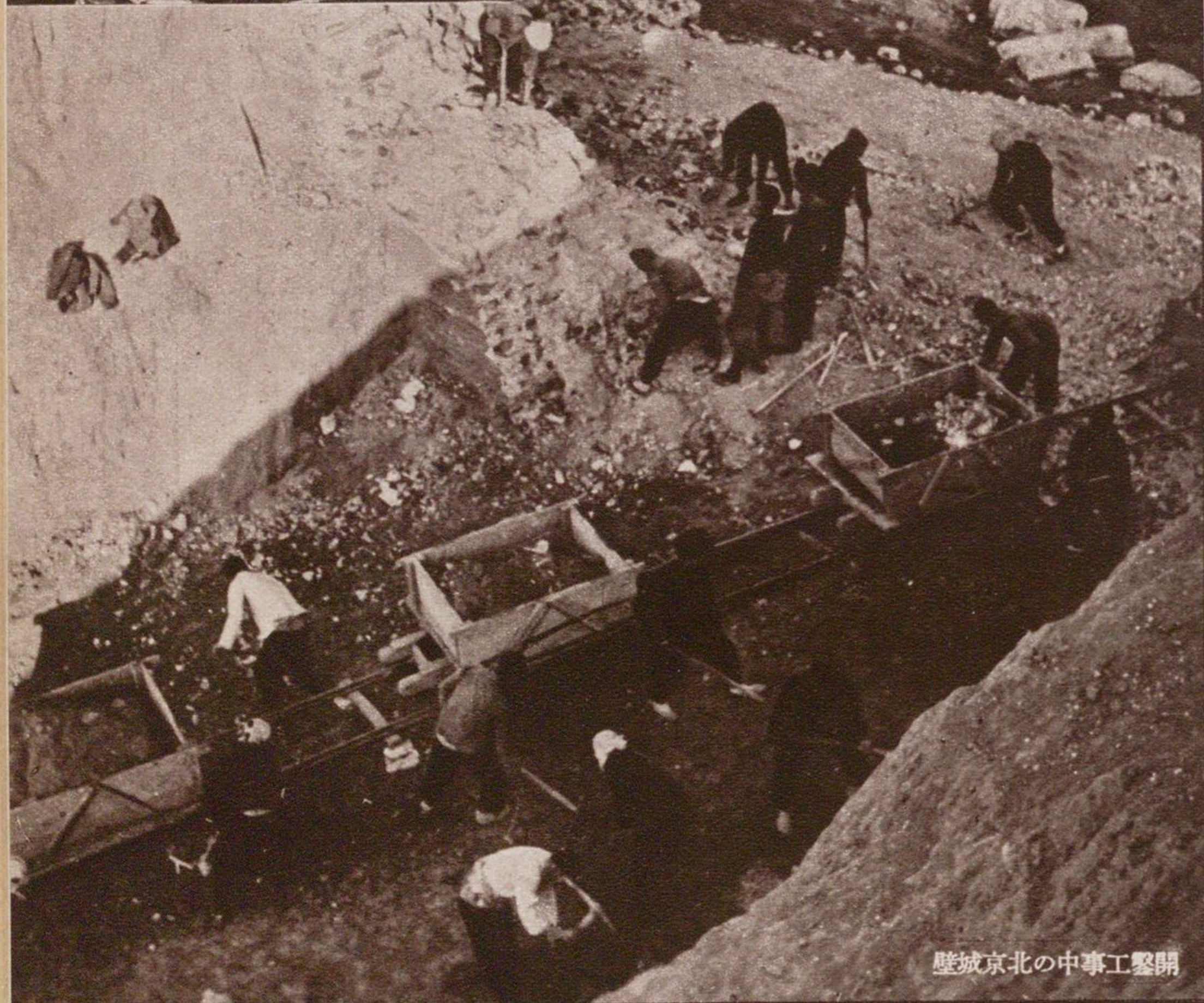
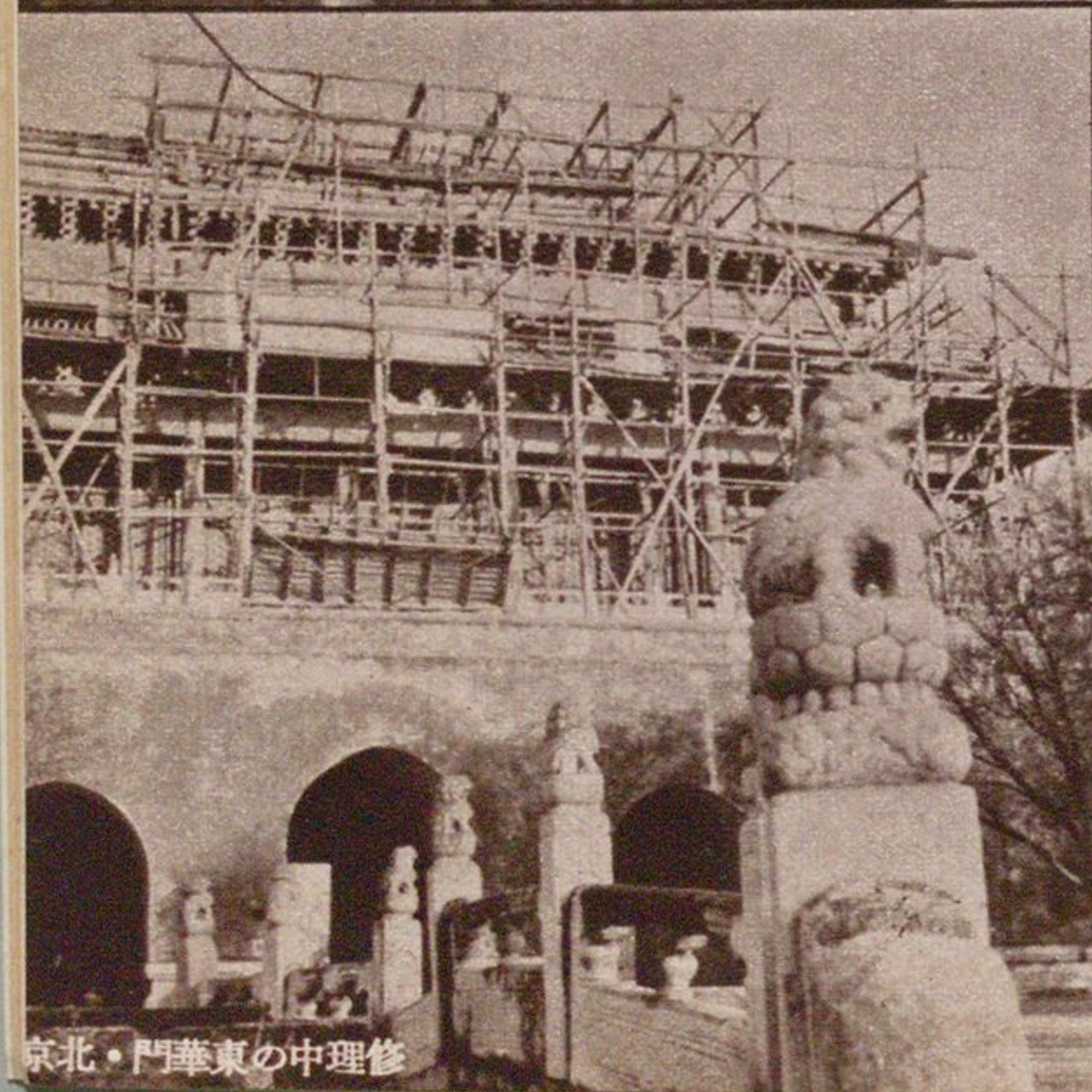
▽北京の古い文化も長い年月の間にはだん／＼と傷んでゆくので、時々修繕が必要となる。有名な景山の長春亭や東華門が高い櫓を組んで文化保存の手が施された

▽華北交通會社の婦人社員七十三名が十一月十二日の日曜を利用して、北京近郊の軍病院に戰傷病勇士を訪れ、慰問袋を贈り、携帶した映寫機、フィルムで慰安映畫會を催すなど、一日を勇士のために奉仕した

景山長春亭の金頂の修理・北京

開鑿工事中の北京城壁

修理中の東華門・北京

華北交通會社婦人社員の戰傷病勇士慰問

豚の効用

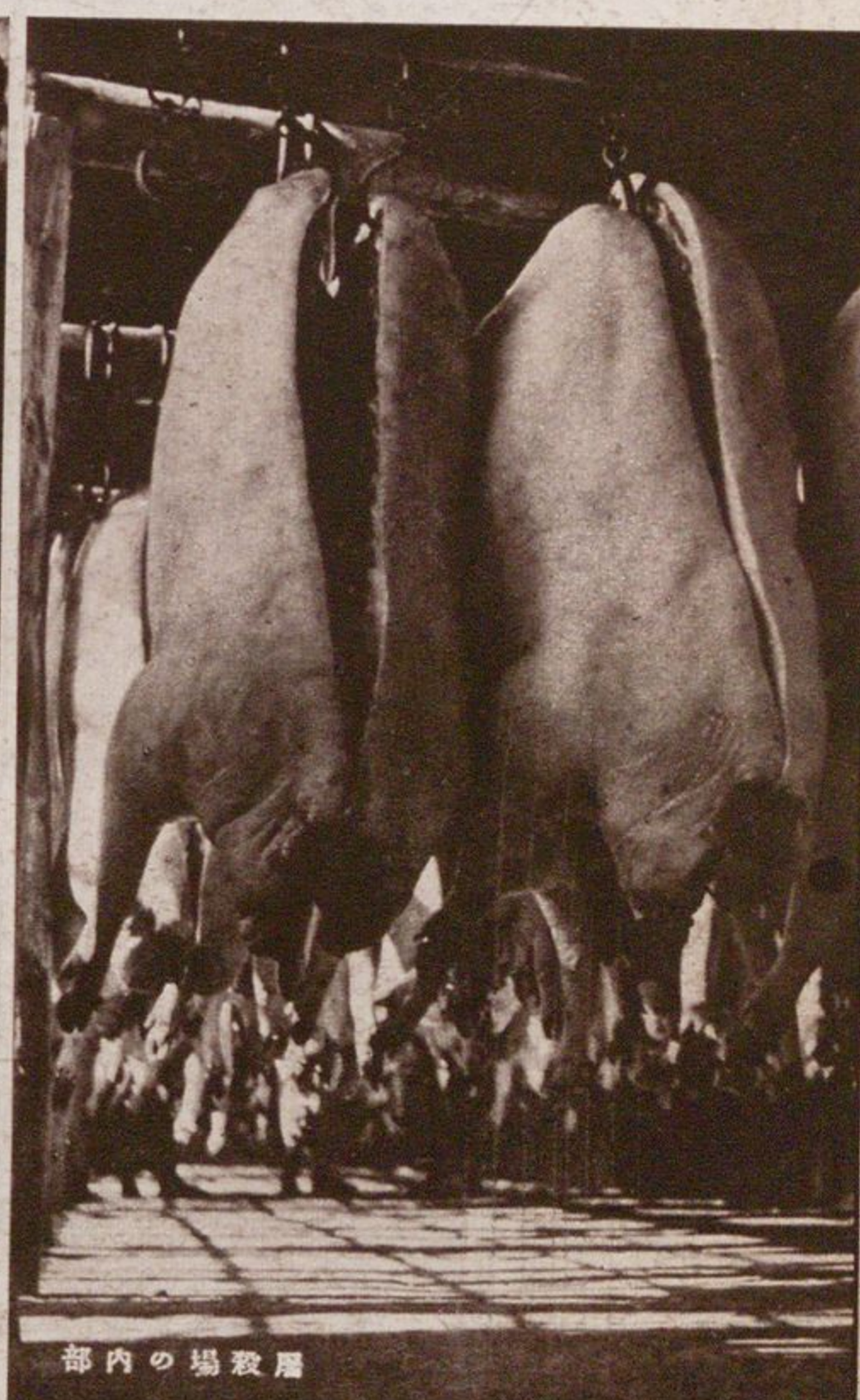
支那に豚はつきもの、その産額も世界一で、北支だけで一千七百萬頭を算へてゐる。人間五人に豚一頭の割合だ。この豚を支那人ほど巧く使ひこなす人種は尠なからう。先づ食用は論外として毛から皮、骨、內臟、蹄、膀胱、さらに血液、糞尿に至るまで凡そ餘すところ一物もない どうせ、飼ひ殺される運命の豚、これだけ活用されれば以て本望となすべき歟

店頭に賣出されてゐる加工食料

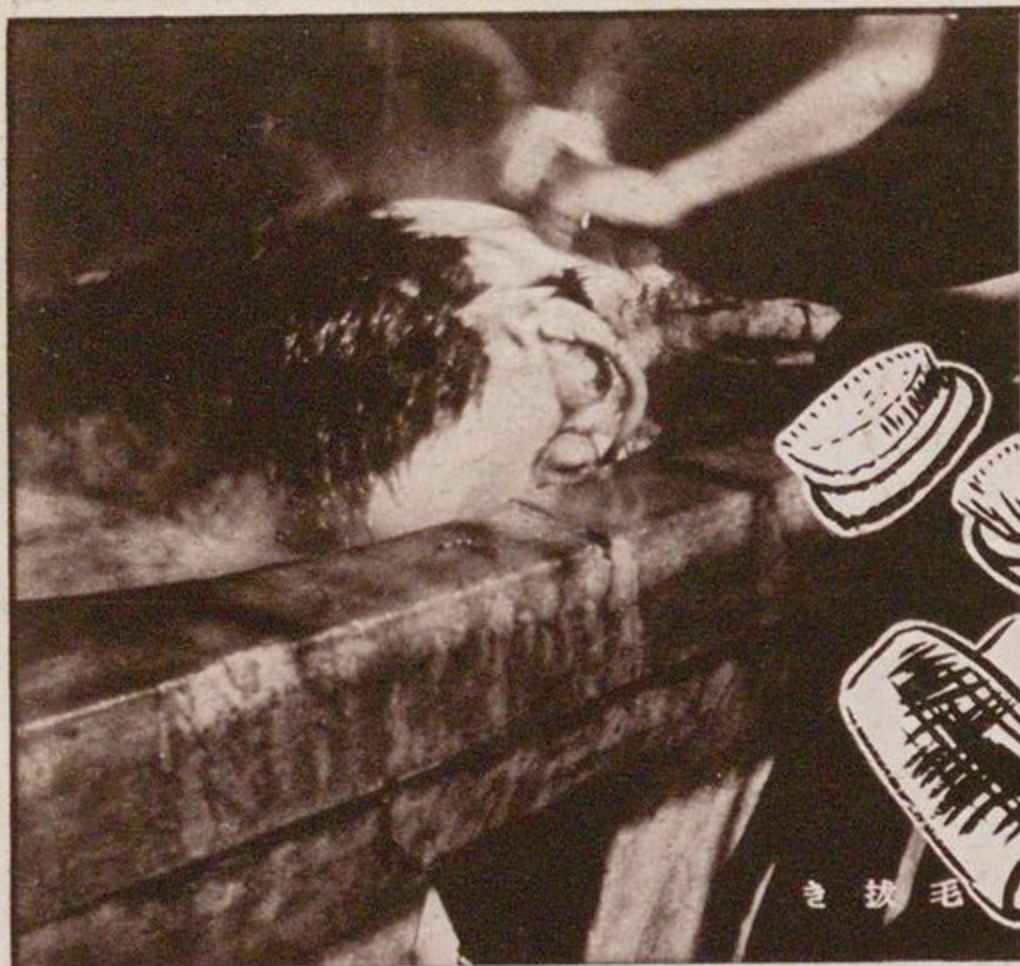
腸や肝やその他の臓物一切を煮て食はす

屠殺場の內部

ハムやソーセージ

肝臓

豚の料理——回教徒でない限り、支那人の食卓に豚は不可缺なもの。料理の種類もなか〳〵多い。先づ料理屋のメニューを御覽じろ。細い字で書き連ねた品名の大半が豚を材料にした物だ。肉は勿論、皮、目、耳、鼻、舌、脂肪、血、腸から肝臓はては脳味噌に至る迄煮たり燒いたり揚げたり、手をかへ品をかへて料理する。豚も支那人の手に掛つてこそ初めてその眞價を發揮し得るといふもの

隊を見て大道へ遁げだした豚公もグ運拙く哀れ斯の通り

毛抜き

豚毛——支那の豚毛輸出額は世界第一位。ブラツシの原料となり最近では織物の材料にもなつてきた

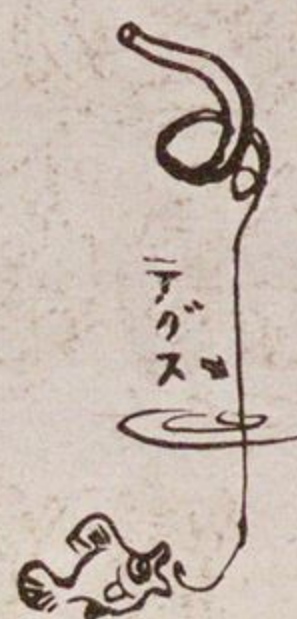
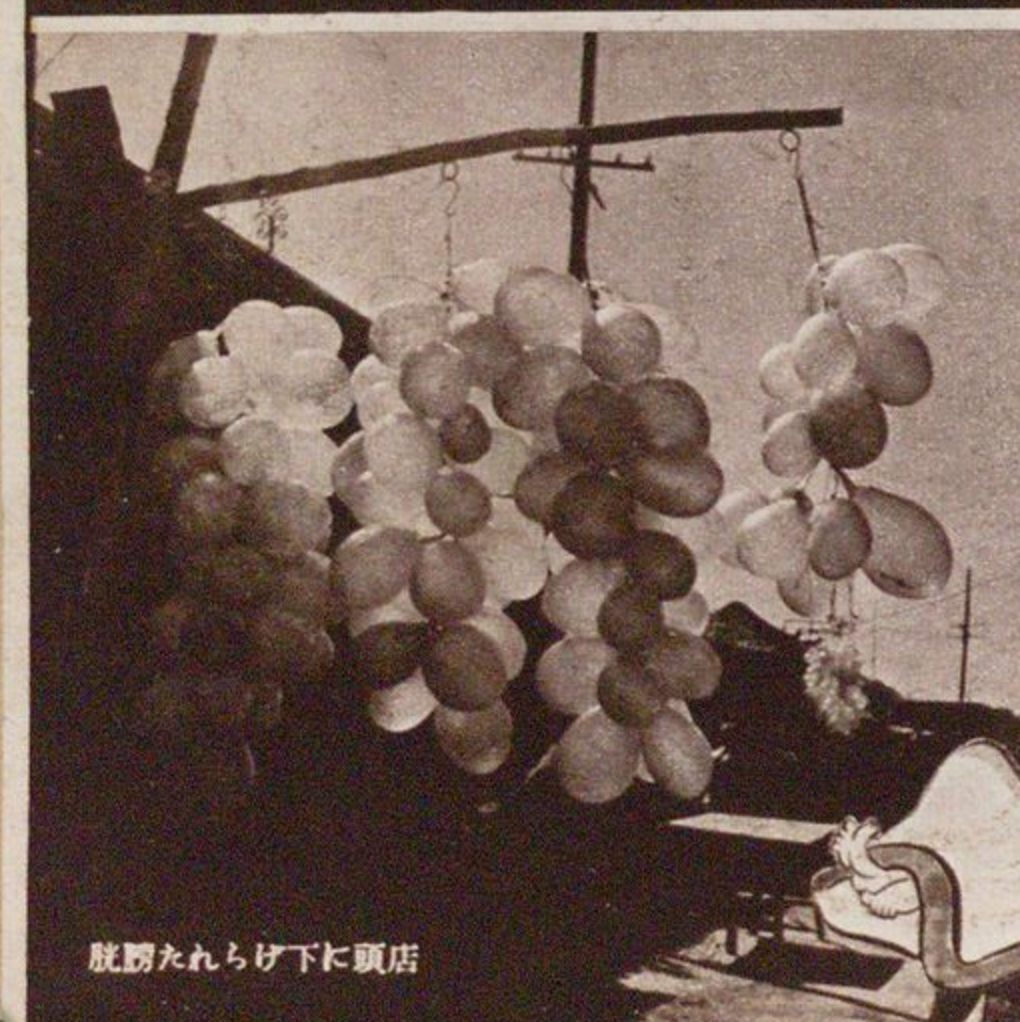
脂肪

脂肪——そのまゝ料理用にもなり、加工してバターに、最近では薬用にも、猪胰子といふ石鹼の材料にもなる

皮——先づ食用。支那の子供の好物だ。代用品萬能の今日、豚皮も牛馬皮に劣らぬ非常時色を帶びてきた。みめ美はしい姑娘の繊手にも豚のハンドバツグ……といふ御時世である

血——血は食用として重寶され、これに漬けた豆腐など支那人の好物である。また籠に塗つたりペンキの下塗りや絹の染料にも使はれる

骨——骨粉肥料として有名だが製糖用にもなり、或は歯ブラシの柄などにも使はれる

腸——食用。特に腸詰用となる。變つたところではテグスの材料にもなる

頭の陳列

頭——眼も鼻も耳も附いたまゝ首實驗のやうな恰好で店頭に並んでゐる。主に料理用だが、時には結婚の結納になつたり、神佛へのお供へになつたりする

膀胱——いろ〳〵用途はあるが、特に氷嚢として重寶

店頭に下げられた膀胱

北京のお正月

村上　知行

大陸のお正月で、さしあたり思出すのは「孟姜女」の哀歌、特にその第一節である。

正月が來た、初春だ
戸ごとに紅燈がともされる
よその家では團欒の樂みあれど、
孟姜女の夫は長城を作りに立去つた

ところで、嘗て人民戰線派の運動に呼應して起つた北京の一部の文人たちは、中國の民衆が傳統的に持つてゐる彼等みづからの文化をとりあげ、それによつて民衆に新しい意識を注入しようとしたことがある。「孟姜女」の哀歌もその際改作され、あまつさへ『諸君！　中國人で生活の最も苦しいのは農民である。農民の中でも傭農がさうであり、傭農の中でも長工（常傭）が特にみじめである云々』といふやうな註釋まで加へられた。改作されたものの首章は左の通りである。

正月裏來正月正
小小的阿喜眞受窮
在家沒飯吃、出門作傭工
一年身價八吊銅

正月が來はしたけれど
年若き阿喜はひどく貧しい
飯が喰へず、仕方なしに傭はれて行つたが
金は一年に銅錢八千文だ

この新しい歌は、それが出ると同時に、當時の冀察政權により彈壓されてしまひ、一般に普及することは出來なかつたけれども、それはそれとして前の「孟姜女」といひ、またその改作といひ、私にはどちらも侘しい中國一般民衆のお正月といふものに對する歎らざる感情の一端がにぢみ出てゐるやうに思はれるのである。

また嘗てある年の大みそかの新聞に私は『いよ〱舊曆の大みそかとなつた。北京百五十萬の市民は、それ〲年越しに忙しい。勿論その忙しさには首を縊るとか、刀で自殺を計るとか、いろ〱方式の相違はあるけれど…』といつたやうな記事を發見して淋しく苦笑させられたこともあり、更にまた例の有名な「聊齋志異」のなかで、

一二三四五六七
孝弟忠信禮義廉

といふ春聯を發見した時には、成程と感心させられた。春聯といふのは正月に紅い紙に書いて門の兩框に貼るもので、勿論緣起の好い文字が選ばれるにきまつてゐる。然るに此處に引用したそれは、上聯に「八」の字がないので「忘八」則ち馬鹿野郎を意味し、下聯の方は「恥」の字が拔けてゐることにより「無恥」を表はしてゐる。思ふに、忘年會だの新年宴會で臭いへどを吐いて忘八と無恥の正體を暴露するよりも、寧ろかういふ風に正々堂々「忘八と無恥で正月を迎へます」と公表して置いた方が、どれ位高雅だか知れない。それと少し意味は異つてゐるけれど、私は日本にゐる時分『また厭なお正月が來ました、可愛がつてやつて下さい』といふ年賀狀を出して叱られたことがある。だがこれは叱つた奴の方が私より頓馬だらう。

偖て北京の正月も、先づ春聯によつて赤く裝飾される。たゞ「一二三四五六七」に匹敵するやうな卓拔なのがないだけである。もつとも北京のお正月――舊曆による――については既に日

内容

本文のものも相當出てゐるし、私自身書いたものもあるので、歳時記的に詳しいことの知りたい方は、それによつて頂きたい。私としては今更それを蒸しかへして筆にする氣もしない。勢ひ妙に偏したことばかり書く譯だが、それはとまれ、苟くも北京の正月に多少でも觸れようとする以上、除夕、乃ち大みそかを一瞥しなければならない。

純中國式な生活をしてゐる私などにとつては、正月よりも、むしろ大みそかの方が興味深く眺められる。もつともそれより一週間ほど前に竈のお祭りがあり、爾來ずつと何處の家庭でも歳迎への準備――たとへば大掃除などもさうであるが――さうした事に忙しく、それも大體大みそかまでに一段落がつく。するとこの日は、中國の俗信で天地もろ〳〵の神樣の下降の日とあつて庭に案を設け、月餅とか蜜供とかいふやうなお菓子類その他を供へて香を焚く。「接神」といふのがこの儀式である。

北京の家の庭――それは方形をなし俗に院子と呼ばれてゐるが、そのよさはみづから住んで體驗しない限りわかるものでない。勿論陰暦の月の終りであるから、月黑の夜卽ち闇夜である。そのかはり「孟姜女」の歌にあるやうな紅燈が、部屋の內外に點ぜられ、敢て月光を必要とせぬ。

この夜、女達は特に若い連中は、眞紅な着物をきる。勿論、形は不斷に彼女等が着用してゐる旗袍なのであるが、たゞそれを紅の天鵝絨とか繻子とかでこしらへたまで。それに顏の化粧も格別に念を入れ、髮にもやはり紅い造花の簪をさす。

中國には昔から「燈下看美人」といふ言葉もある位、美人は燈火のかげにみるべきものとされてゐる。大晦日の晚は恰もさうした「燈下看美人」の絕好の機會である。五月の朝の薔薇の花よりもよりはでやかに、鮮紅そのものの如くよそほひなした彼女等が紅燈のかげに香を焚く。蠟燭の灯があかい薄紗を透して、彼女等の頰にゆらめきかかるとき、齊眉穗兒といはれてゐる可憐な前髮のハラ〳〵と房なして垂れた下から閃々としてひらめく彼女等の瞳の如何に黑いことであらうか。その濃いお化粧の如何に匂やかなことであらうか。それは直ちに我々をして中國の舊い、妖且つ艷なる幾多の物語りを想起せしめるであらう。

なほまた彼女等が庭を步く時、彼女等が穿いてゐる紅い靴――靴まで紅いのを選ぶのが本格的である――その下に何ものかミシ〳〵鳴る音を耳にするであらう。といふのは、あらかじめ庭に一面胡麻の殼、つまり實をとつたあとの枯れた葉や莖がばらまかれてゐるからで、それが人の足に踏まれるとミシミシ音がして碎ける。これを「踩歳」といふ。踩は踏むの意味、歳は碎に通ずるのであるが、しかしどうしてそんなことをするのか私は知らない。逝く年を踏み碎いてしまふといふ了見なのかも知れないが、そんな曰く因緣は別として、彼女等が三々伍々、紅き裳をかゝげつゝ互にキー〳〵聲ではしやぎながら踏みつけ、踏み碎いてゐる光景は、何だか色つぽい小說の一頁のやうである。

大みそかは、かうしたことで夜を徹し灯を絕やさず、人々もまた「守歳」と稱し、なか〳〵眠らうとしない。大抵はストーブを圍みながら話に耽けるとか、または例の麻雀で、餘程の寢ぼ助か何かがこつそり人々を離れ、蒲團にもぐりこむだけである。

この外、書けばいくらもあるが、それは割愛して直ちに元旦の一瞥に移るとしよう。これも凡そ紹介濟みであるが、たゞ私が思ふのに、幾らさうした本を讀んだ人にせよ、若し實際に家庭の中で中國式の儀禮をやられたなら、恐らく面喰つてしまふだらう。例へば元旦の朝の挨拶である。日本で丁度お雜煮をたべるやうに、北京では素餃子といふのをたべる。これは一種の精進物で、この日精進すれば、その御利益が一年三百六十五日ぶつ續け精進するのに匹敵するといふ迷信から來てゐるらしいが、それを食べるに先立ち、家族は家庭內の長上に對し挨拶をしなければならない。それも例へば伜が母親に對する場合を例にとつてみると、

『母親！ 孩兒與爾老人家拜個年、我跪了！』

といふやうな、芝居のせりふめいた口上をいつて跪く。召使などが主人に對してもやはりさうであるが、若し日本人で誰かからかう跪かれたならば、はツととち面棒ふるだらう。

素餃子、お屠蘇めいた酒、そんなことんなが濟んだあとは、東嶽廟とか財神廟とかへ、日本の所謂「初詣」を試みるし、また前夜來、爆竹が鳴りどよめいてゐることはいふまでもない。しかしそんな書きふるされた方面は、改めて述べるまでもなからう。で、私はいつも正月のざわめきの中に、「孟姜女」の哀調を思ひ出すといふことを附記するだけでこの文章を擱く。

北支の農村 7

正月と農民

みづの・かほる

北支農村の正月は相變らず、陰暦の正月である。一應官廳を始め陽暦の提唱によつて、都市に於ては多少改められたやうでもあるが、農民は依然として動じない。陰暦は何んと言つても、農家の年中行事にあてはまつて居り、農村の社會經濟全般がそれに沿つてゐるのだから、今更それを急に變へようといふのが無理な話である。

私の子供の時分は、日本の農村でも陰陽二回の正月を迎へてうれしかつたことを覺えてゐる。しかし日本の陰暦は、その後廢たれて易々と陽暦一色に移つて行つたが、北支の陰暦は何んと言つても、陰暦の本家本元であり、それが又天地萬象を相手とする農村田園に因緣が最も深いのだから、さう日本のやうにあつけなく改められる道理がない。

年明けて一陽來復といふ氣持や、春風駘蕩と言つた氣持ちは、陽暦の正月では北支ではピンと來ない。まだ寒さの眞つ只中である。それに新正と言へば、農家は秋の收穫を終へて、秋麥を播きつけたばかりで、脫穀をした穀物もまだ充分に處分がついてゐないし、從つて重い肩の凝る借錢も片づけないで、そんな正月では、氣分のくつろいだ年越しも出來ない。

それが舊正だと言へば、文字通り戶外は春立ち初めて、南の陽うけには、若草さへ萠えようとする。農家の一切の行事も今は一段落してしまふ。

北支の農村には、五月と八月の節句と、正月の三大節とがあるが、この三大節は、農村に於ける貸借のくぎりでもあり、また農家の骨休めであり慰安日であるのである。だが五月と八月の節句は、農村ではほんの一日一回の御馳走を食べるくらゐのことであるが、正月だけは、徹底して休み、そして喰ふ。私は北支の農村の正月を見て、しみじみ年が改まるといふ感じがするのである。

北支の正月は、日本の正月のやうな名ばかりの形式的な正月などとは、凡て趣が違ふ。一年の計は元旦にありといふが、北支の農民は、それをそのまま生かしてゐるのである。北支の正月は、全く木の年輪のやうに、農民の生活をはつきりと區切つてゐる。

北支の農村の秋のとり入れと、その後仕末や、秋麥の播きつけも、大體陰暦の九月にもなればすつかり片づいて立冬の節になると、常傭の農夫も解放されて、暖かき己が家族のふところに歸つて行く。

それからの農家は、家族同志で更に農事のあと仕末や、穀物の餘分は市に賣り出して、小金をつくつてから、陰暦十二月の十五日頃までには、また來る年の小作地の契約をしたり、借金を拂つたり、拂ひ切れない分は利子を納めたり、冬ごもりの買物の用意をする。一年の辛苦を犒ふために、妻子達へ綿入れの晴着を買つてやつたり、三年前から人並にかぶりたいと思つてゐた一圓足らずの帽子を、やつと買ひ入れて悦に入るおやぢもゐる。

○

さて、陰暦十二月半ばを過ぎれば、もう農村には年末氣分がたゞよふ。

二十三日は小過年と言つて、農家の一年を見守つて下さる竈の神様が、遙遙天上の玉皇大帝の所へ、一年間の出來事を報告に旅立たれる。旅立ちの晩は、是非いゝ報告をしていたゞいて、

大帝の忿りに觸れぬやうにと、祭壇を設けて、竈の神樣がお騎りになる馬を元氣づけるために、水と粟稈と高粱の餌を供へる。そして、神樣があまり口を滑らし過ぎて、犬も喰はぬ夫婦喧嘩のことなどを告げられては大變だと、神樣の口をしどろもどろに粘ばらすやうに、飴でつくつた糖瓜を供へたり、竈の焚き口に、糖瓜をすりつけたりする。この日の晝御飯は平常と變つた、さゝやかな御馳走がつくられる。

小過年が來ると、正月の準備が始められる。年紙—これは對聯を書いたり神前で焚く紙の總稱—や、線香や、爆竹や、蠟燭や、點心—菓子などと、正月の供物を買ひ揃へたり、富農は正月に鱈腹喰はうと、秋口から肥育して來た豚や、鷄をしめたり、貧乏人は又それぞれ分に應じて、何斤かの肉を市から求めて來る。豆腐は、貧富のけじめなく、自分の內で出來た大豆で、妻君どもが腕によりをかけてつくる。その他白米や、小麥粉や、糯黍や、酒や、醬油や、胡麻油や、粉條子—支那ざうめんや、砂糖等と、あげて正月の御馳走の材料が、いとも零細な金を工面して準備される。

二十四、五日には、眞つ赤な年紙で書いた對聯が、入口といふ入口には、家も、大門も、豚小屋も、馬小屋も、泥棒番の犬小屋までも、目もあでやかにべた〳〵とはりつけられ、流石の賤が伏せ屋も陽氣づいて來る。大門を出たところへは出門見喜と、家の寢間には擡頭見喜と、瑞祥を迎へる文句が掲げられる。

入口の對聯は、思ひ〳〵の文句が選ばれ、舊家や、學者じみた家では、古今の名句を並べて得意がる。この對聯書きには、小學校の先生や、村の字書きといふ字書きが動員されて、水茎の跡も美しく、渾身の筆致を揮つて、字のよさ、文句のよさを互に賞で合ふ。農家のことだから、荷車にまで正月を迎へさすために、車行千里路、人馬保平安などと書いた年紙が貼りつけられるのも、農民のゆかしさがうかゞはれてうれしい。

三十日の大晦日には、竈王が報告の旅を終へて下天されるが、糖瓜をあまりなめ過ぎて口がねばりついたのか、何の御挨拶も無い。その晩は御馳走を食べて、夜中ろく〳〵寢もしないで、家の中にも、院子の中にも、煌々と燭をともし、爆竹を打ちあげて賑ふ。祭壇には供物をそなへて、祖先の靈に祈り、八百萬神に祈りを捧げる。香煙は縷々として家を、院子を埋めて、一家眷族は、平和の坩堝に解け込む。

〇

明けて一日は、早晨に年紙を焚いて天地に祈り、爆竹をあげて齡を重ねる。この朝特に財神を祀るのは、今年一年の福德を祈願するのである。一日の午前中は、男のものが、同族や近所隣りへ年始廻りをする。二日は女どもが、同じやうに同族へ年始廻りをする。

年始は、男は昔のまゝの兩の拳を揃へて上にさゝげ、女は古風な前清時代の禮式そのまゝのちよこんと腰を曲げて、拜新年、叩新喜、見面發財などと言つて挨拶する。この挨拶は、正月中であれば、年明けて始めて出會ふ知友には、同じやうに相互に交はされる。

一日から五日までは、毎晩燭をともし、線香を焚いて神に祈り、一、二、三日は、豚饅頭や、黍でつくつた餅やお米の御飯が御馳走として出される。四日は平常で、五日には又同じやうな御馳走がつくられる。

六日からは、富農は別として、一般の農家は、輕い家事や農事にとりかゝるが、まだ正月氣分は去らない。この間に村によつては、村の男達が集つて高脚踊や、龍燈踊や、早船踊等の催し物をしたり、或は隣り村から練り步いて來る催し物に、村の老若男女は、それの見物にどよめき返る。

五日までは、賭博も天下御免で、男も女も、銅子兒や僅かな金で、とりどりのかけごと遊びに無中になる。大きな村では、影芝居があつて、花かんざしをさして村の娘が、今宵ばかりは籠から放たれて、朗かに笑ひ興ずる。村の老人達は、三々五々つれだつて、村の廟へお參りしたり、同族の墓へ詣うでて、若き日の物語りに花を咲かす。

五日が過ぎると、新婚の夫婦は、菓子箱の贈物をさげて、妻の里へ年始に行く。着飾つた新妻を驢馬に乘せて、芽麥青む野良の小道を急ぐ田舍の新春風景は、繪よりも美しい。

十五日は、愈々正月氣分の最後のとめである。この日は元宵節、或は燈節と言つて、縣城では大變な賑ひであるが、農家では御馳走をして、夜は正月と同じやうに燭をともし、線香を焚いて神を祀る。

かくて二十三日の小過年以來、一ケ月餘に亙つて、農村はあげて正月氣分に浸る。そこには貧富の境はない。農民は一年の勞苦を慰められ、滿ち足りて、さらに新たなる勞苦をすなほに迎へる。もはや戶外は、春陽がなごやかに照つて、野良は農夫を待つてゐるのである。

京漢沿線

史蹟ところどころ

小野勝平

北京の外城壁を過ぎたとき、左側の車窓から見えるのが天寧寺の塼塔だ。寺傳では隋のものだといつてゐるが、造塔の樣式から考へると、どうしても遼代のものである。遼は今から約九百年前、北方に興起した契丹族の國である。近時やかましく謂ふ契丹文化は彼等の活動してゐた時代、その國に創められた文明を指し、この天寧寺の塔などもその一所産だ。汽車の進行につれて、良鄉の多寶塔や涿縣の智度・雲居寺の雙塔などが見える。それらも皆この時代に造築されたものである。

天寧寺の塔を過ぎれば間もなく蘆溝橋だ。一文字山の記念碑が見える。此處が、新たなる世界史の發端地點なのだ。發展してやまぬ明日の歷史は、將來まづ一文字山から說きはじめられるであらう。小さくはあるが、錐のやうに大空に向つてゐる白い石の碑を新たなる意識と感激とで見詰めようではないか。蘆溝橋といへば、昔マルコポーロが通過して、其著「東方見聞錄」にはプリサガンと記してゐる。プリサガンとはペルシャ語で石の橋の義ださうだ。此處はまた燕京八景の一つで「蘆溝の曉月」と稱され、金代以來文人墨客の親しむ處である。

琉璃河から本線を離れると、周口店に至る。周口店が世界的に知れ渡つたのは約十年前、支那舊石器時代の人骨が此處で發見されたからだ。今から數萬年、否もつと古い時代のことであらう。北京人（シナントロプス・ペキネンシス）と名稱づけられる古人類が、自然に出來た此の邊の洞窟を居所として生活してゐた。彼等は簡單な打製の石器を使用し、附近の動物等を殺しては食べた。さうした遺蹟が此處には存するのである。房山といふ著名な佛蹟は周口店から東北、少し離れた處にある。唐代以來の聖地で、當時から遼金に亙つて、石に刻まれた諸種の經典がなほ殘つてゐる。

高碑店は戰國の昔、趙と燕との國境になつてゐて、當時は標識として、高い碑が建つてゐたといふ傳說がある。

そこで支線に乘り換へると達するところは西陵だ。西陵は東陵に對する謂で易縣の永寧山麓にある清朝の諸陵を指す。清朝は入關以後、この東西兩地に交互に陵を營んだ。されば此處には雍正・嘉慶・道光・光緒の諸帝及びその后妃等が眠つてをられる。易縣は史蹟に富む處で、例の「風蕭々として易水寒し、壯士一度去つて復歸らず」といふ荊軻の故事なども此處でのことである。その易水は縣城の西を今も靜かに流れてゐる。附近には古の燕の都もあり、土城の跡が猶點存してゐて、時々農夫の犂の先に當代の遺物が觸れるさ

うである。燕には都が二箇處あつた。一つを上都と呼び、恐らく今日の北京に當ると思はれ、これに對し易縣にあるものは下都と呼ぶ。私が此處を訪れたのは昨年四月の中旬であつた。楊柳の若綠の間に桃花が點綴し、カマボコ形の屋根を持つた農家はをちこちに隱顯してゐた。これを恰も抱くやうに、褐色の地肌を現はした西山が迫つてゐた。空は紺碧である。車窓から眺めながら、武陵の桃源とは多分こんな光景から想像した境地であらうと考へてみた。全くなごやかな美しい景色であつた。然し縣城に着いて聞くと、郊外は土匪の跳梁が甚だしく、外出は頗る危險だといふ。私は西陵は勿論燕の下都址へも遂に行くことが出來なかつた。燕、趙の悲歌、慷慨の士も末裔にいたつては匪賊と墮するかと嘆じたことであつた。

保定に下車して一人の稍々年老いた兵隊さんに『此處で見るべき處はどこでせうか』と尋ねると『蓮華池ぐらゐかな』と答へてくれた。蓮華池といふのは、池を中心として、その周圍に或は築山を造り、花樹を植ゑ、或は亭樹を建て、廻廊を連ねた城內唯一の公園である。池は元の時、長官の張柔が創め、明、清相繼いで重修し、今日に至つたものである。雍正十一年、此處に蓮池書院を開設し、子弟の教育を行つた。清末

には日語教授の先驅者中島栽之助氏が教鞭をとつたこともあるといふ。今の師範學校の前身が卽ちこの書院だ。池内には六幢亭とよぶ經幢を集めた建物があり、その他幾多の碑類もある。田仁琬德政碑は唐の名書家蘇靈芝の筆で頗るみごとなものである。

北宋以來定窰の產地として知られた定縣は、近時河北省に於ける諸般施設の實驗地としてまた名高い。歴史上から見ると、曾て宋と遼とが南北に對抗してゐた時代、宋側の最前據點でもあつた。車窓から見えるのは開元寺の十三層の塼塔だ。高さに於ては支那屈指のもので、眞宗から仁宗に亙る大建築である。これが一名瞭敵塔とよばれるのは、その後宋軍が、此處に登つて遼の動靜を窺つたが爲だと傳へてゐる。光緒年間、北面が崩壞した。涿縣南塔が奉直戰爭の際に破壞されたのと共に隨分惜まれる。なほ城内には小規模ながら博物館もある。附近に存し、或は出土した貞石・佛像その他土器、陶器類を陳列してゐる。

定縣から西方へ距ること數里、曲陽縣がある。此處には北嶽廟があつて、支那五嶽の一つ北嶽恒山を祭祀するところだ。清朝以來、朝廷の祭祀は晉北渾源縣で行はれるやうになつたので、漸く衰微はしたが、流石に漢の武帝以來の名蹟のこととて規模は大きく、唐以後の碑も林立してゐる。神殿たる德寧殿は元朝の建立であるが、今次の事變でやゝ荒れたのは惜しい。風雨の順調を掌ると考へられてゐる山嶽の神に對して、農業國たる支那が古く厚い信仰を傾けたのは當然のことである。石家莊の南の元氏などにもやはり六神祠とか八都壇とか稱する山嶽神の廟宇があり、此處もまた後漢以來の由緒を持つてゐる。三公山碑、封龍山頌、及び白石神君碑などは當時の記念碑であるが、今は城内に移置して保存されてゐる。これ等はたゞ歴史的意味のみでなく、文字を崇ぶ支那では金石學的にも頗る珍重してゐる。

石姓の莊園といふ名稱自體から推される通りの小部落石家莊は正太線の敷設以來急激な發達をとげるに至つた。最近のニュースで見ると、マツチ箱の様だつた汽車も愈〻姿を消すこととなり、名稱もまた石太線と變更したさうである。狹軌から廣軌へ、正を石にと改めるところに時代の變遷を看取するは私のみではあるまい。いふ迄もなく正とは正定の頭文字だ。曾て正太鐵道と稱したことは、色々な理由があるかも知れないが、その初め都會としての正定の前には、寒村石家莊が物の數ではなかつたことを否定するわけには行くまい。今でこそ堅固な城廓の中に蜷込まうとしてゐるが、火車とよぶ近代的な怪物が走り出すまで、實に正定は政治、經濟、交通、軍事の諸方面に亙つて古い時代から重要な位置を占めてゐた。然しその事に關しては長くもなるから觸れないでおく。そして此處では、たゞ華かだつた往時の史蹟だけを二、三擧げよう。車窓からは二個の塔が見えるだけであるが、城内には四個の塔がある。土地の人々は、それを木塔、方塔、青塔、花塔とよんでゐる。木塔は天寧寺、方塔は開元寺、青塔は臨濟寺、花塔は廣惠寺に屬する。然しこの中で僧侶のゐるのは臨濟寺だけである。臨濟宗はわが國にも傳つた禪宗の一派で、この青塔は金の時、開祖臨濟禪師の舍利を奉じて建立したものである。彼は城外に居住したのであるが歿後お寺は現在の處に移つた。今は境内も狹く、建物も簡素で、釋迦を中心に達磨と禪師とを左右に配した佛殿と僧房とがあるに過ぎぬ。然し恐らく昔もさほど大きくはなかつたであらう。その方が一派を創めた禪師の精神にも相應しい。塔こそないが、城内には俗に大佛寺といふ名利がある。隆興寺が本名で、または龍興寺とも書く。その創基は隋代である。現在は荒廢して、見る目も痛ましい箇所がある。宋の太祖が此處に千手觀音像を鑄造し、大伽藍を營み、國家安穩、衆苦濟度の理想を顯揚して以來、歴朝の尊崇は厚く、寺運は殷盛を極めた。この像は高さ七丈二尺といはれ、現存最高の銅像だ。猶、境内の摩尼殿、轉輪藏慈氏閣等はこれまた宋代の建築と認められてゐる。この寺には曾て日持上人が留錫されたとも傳へられる。西隣の天主敎會は清朝時代の行宮の跡である。今では十字架の高塔によつて寺院が壓せられてゐる有様だ。城内には、この他陽和樓、唐李寶臣紀功碑などがある。後者は節度使華かなりし頃の記念である。

石家莊から少し離れてゐるが、趙縣に栢林寺がある。五代の名僧眞濟禪師の留錫した古刹で、正定の臨濟寺とならび稱される。また城外には大石橋がある。大小五個のアーチからなり、中央の大きいアーチは直徑約四十メートルに近い。一千三百年前、隋の工匠李春の架するところと傳へ、今から見ても驚くべき技術である。唐宋以來、題名詩文の勒せられるもの多く、今日も正定の大佛と共に北方の勝蹟として數へられてゐる。（未完）

可園雜記

加藤新吉

可園雜記々者は幾月ぶりかに可園を出て旅をした。天津以南の洪水の跡は津浦線の車窓からなほまざまざと見られた。日暮に水なき黃河を過ぎて、今を去る十五年、民船の灯を見つゝめりめりと音のする危げな鐵橋を渡つたことを想ひ出した。濟南から徐州、徐州から開封、そして今夜は京漢線の新鄕に泊る。十一月十五日である。

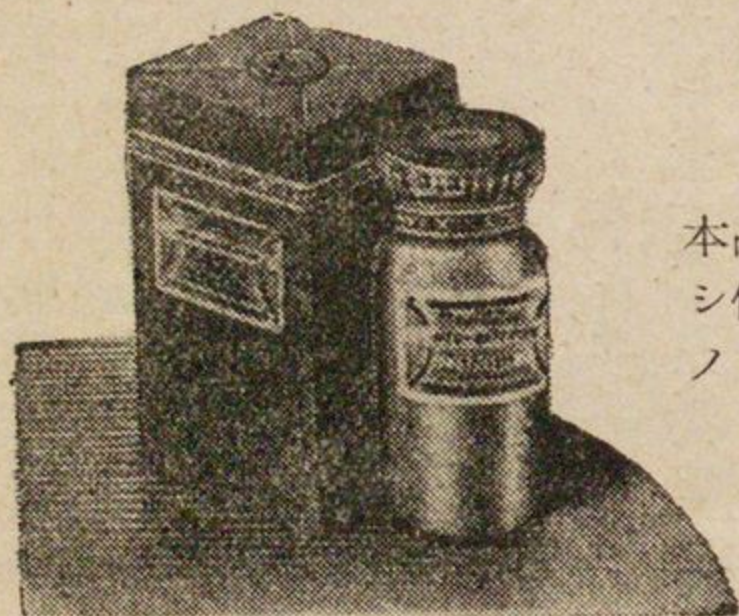
濟南は水の都と謂へよう。邦人に有名な趵突泉の他に黑虎泉、金綫泉、珍珠泉など到處に滾々と淸冽な水が湧いて居る。黃河の伏流がこの下を流れてゐるのだといふ人もある。

北京郊外の玉泉山に建つて居る乾隆帝の天下第一泉の記に、水は輕きを以て尊しとする、銀斗を製つて權つてみたら玉泉の水は一兩、塞外伊遜の水も一兩、濟南の珍珠泉は一兩二厘と書いてある。それから中間のところは忘れたが、段々に重い水を擧げて、終に、雪を解かすと水より輕いが雪は常にはなく、塞外伊遜の水は北京に運ぶ譯に行かぬ、だから玉泉の水が天下第一だと斷じてある。濟南でそのことを想出して訪ねてみたら、珍珠泉は故の省政府內、曩に韓復榘が燒いて逃げた廢屋無人の境に澄んでゐた。北京に住んで屢々玉泉の水に惠まれる私は、またこゝに珍珠泉の水を掬しそれで茶を點てる福を喜んだ。その日、平田濟南鐵路局長―彼氏は食通である―の指導による土産の牛肉と鯉魚と葦根との料理を御馳走になつた。思へば濟南は口福と眼福と共に豐なところであつた。

眼福は太公望呂尙が綸を垂れて文王を釣つたといふ大明湖の岸にあつた。そこに在る舊圖書館の一屋には漢の畫像石が群つて居る。濰縣、滕縣、其他山東各地の近年の發掘品を集めたものだ。此種の斷片ならば兎も角、纏つたものとしては只一つ武梁祠、それも拓本で見ただけである。それがこゝでは所謂腐る程あつて決して腐らず、昨日今日彫つたかの如き生きた鑿の跡を見せて居る。眞に瞠目すべきものだ。勿論專門的なことはわからないが、一口に云つて其よさ、時代のよさ、私は今更の如く漢代を偲んだのであつた。

漢玉、漢鏡、漢碑、陶瓷、品の何たるを問はず漢の物は飽迄漢の物であつて其以外の物ではない。假令幾百里を距てても何かしら爭へない時代の特徵をもつて居る。無論此事は他の時代に就ても云へるであらう。そしてまた地方的特色も固より看過できないが、夫よりも時代の相違、甚だしい場合には僅々何十年かの相違の方が動もすれば著しくはないか。私は、何時もしみじみ時代の力の偉大さを思ふ。

近い話、乾隆は淸朝の最盛期と謳はれるが實は峠を越してゐたかと思ふ、其時代の物が整ひ過ぎて力と味とに乏しいからだ。後先十三、四年の相違であるが康熙には鬱勃たる氣魄、未完成の迫力がある。乾隆は旣に固定、今一步にして墮落するばかりである。乾隆の筆蹟は今度の旅でも飽きる程見て實際にも飽きた。只一つ徐州雲龍山上の一小品に表はれた雄勁な筆を珍らしく見ただけである。書の巧拙は判らぬが十の乾隆より一の康熙が好ましい。その陶瓷亦同樣である。

漢代、漢民族の勃興期、その時代と民族とのもりもりと盛り上る力を私は繪に見、字に見る。そして其力が今どうなつてゐるのかと考へるのである。

水閥の話

河島徳司

北京で使用してゐる飲料水は大部分井戸水である。水道の施設は民國の初年、已に出來上つたのであるが、これを使用してゐるのは、支那の金持か日本人または西洋人達で、水道料金と施設費が高いので、市民の大部分は未だ井戸水を用ゐてゐる。

胡同の入口や大街の樹の下で眞裸になり、カランコロンと音をたてながら水を汲み上げてゐるのは井水賣りの水夫たちで、支那特有の一輪車をギイーギイー押しながら、各戸に配水して廻る。太陽が景山のあたりを茜に染め、物賣の聲が遠く夕靄のなかから流れて來る頃、ヨチ〳〵とのんきさうに、腰で調子をとりながら一輪車を押して廻る水夫を見かけるのは、一つの樂しい風景である。ギイー〳〵と一輪車のまのびした音が聞えて來ると、これに調子を合せるやうに、澄みきつた空から鳩笛の音が流れて來る。じつと聞いてゐると遠い昔に返つた樣な思ひがする。

一輪車の音、青空を翔ける鳩の群、物賣の聲、この三つは北京ののびやかな氣分をかもし出す大切な要素と云ふべきものだが、とりわけこの一輪車の音は古都北京の胡同の雰圍氣にぴつたりしてゐる。然し皮肉なことに井水業者の間には、この一輪車の音とは似ても似つかぬ水閥といふ嚴めしいものを形成してゐて、北京の街に一つの暗黑面を作つてゐる。

北京には昔から三閥と云つて糞閥、瞎子閥、水閥があつた。糞閥は下肥え汲み、瞎子閥はめくらの按摩、水閥は井水業者の集合であるが、三閥の内でもこの水閥の團結が一番堅いと云はれてゐる。

彼等は各々、ちゃんとした繩張を持ち、その繩張内の民家や商店への配水を獨占してゐる。このために彼等は市民に對して甚だ横暴を極め、色々な難題を吹きかけては市民を困らせるのである。

彼等の繩張即ち販賣區域のことを北京では「水道」と云つてゐるが、この水道の範圍は大きいのになると四胡同(露路)から五胡同、小さいのは二、三胡同位に亙つてゐる。

水道の持主は井水戸の所有者とは全然別個人で、水道主は井戸主から水を買ひ之を市民に轉賣してゐる仲買者みたいなものである。井水の使用期間は大體一ケ年と定まつてゐるが、双方の都合では終身或ひは無期限に契約されることもある。井戸主は水道主から感情を害されると、その買入を停止されるので甚だ温順しく、その使用料金も水道主の云ひなり放題で一月二、三圓から四、五圓程度である。

北京の井水戸は天下第一泉と稱されてゐる玉泉山(北京の西北郊に在る)の水脈と同一だと云はれてゐるが、井水戸の内には茶人の渴望するやうな良水を湧出するところが少くない。南横街の姚家井、八面槽の幽香泉、米市大街の第一泉等の水は、素晴しく甘味があり、昔から茶人達を隨喜させてゐたといはれてゐる。幽香泉の井水戸の上には前北京市長江朝宗氏の扁額があり兩柱には、

幽泉湯湯取之不竭
香水混混來馬無窮

の讃辭が掲げられてゐる。

北京の銀座と云はれてゐる王府井大街の街名の起りはこの大通りに井水戸があつたからである。事變後邦人の數も三萬四萬と增加して來たが、この王府井の所在を知つてゐる人は少いだらう。三條胡同の西口、庸報支社の前面道路の眞中に鐵板をかぶせ、アスファルトで塗込まれた個所がそれである。この井水戸は王府(王族の住居、今の庸報支社)專用の井水戸で、北京でも一、二を爭ふ良水であつたが今では井水戸の上をブウ〳〵ゴロ〳〵と自動車や洋車がひつきりなしに通つてゐる。また米市大街の第一泉も日本人の手に買收され、井水戸はつぶされて、カフエーまたは料理屋がその跡に建築されるさうである。この樣にして名前のある井水戸が時勢の波に引きずられて段段と姿を消して行くことは北京の茶人や、北京の古い匂を愛する人達にとつては甚だ物寂しいことであらう。また以上の樣に有名な井水戸がだん〳〵なくなつて行くので、南横街の姚家井や幽香泉は甚だ珍重せられその使用料金も他の井水戸に比べて遙かに高く、一月十圓から二十圓程度になつてゐる。

また水道主の繩張りを手に入れるには普通の人ではなか〳〵容易でない。それは、水道主が死亡したり特殊な事情で北京を離れ、その權利を手放すとしてもその讓受けは同業者に限られてゐるからである。又その讓渡金もなか

なか高價で、前門外や、王府井、南池子、北池子、東單牌樓の様な繁華な地域では七八百圓から一千圓程度の高値を呼んでゐる。また宣武門や西四牌樓附近のやうな邊鄙な處でさへ一百圓から二三百圓を上下する。

市民達に賣る井水の値段は一桶（約五六升）二錢から三錢で、社會局の公定價格七桶十錢を遙かに超えてゐる。現在の物價昂騰ではこの公定價格の無視されるのも仕方あるまい。一日の一水夫の賣上げは十二車から十五車で、車の容水量を平均七桶として三圓乃至四圓の收入を得ることが出來る。普通の水道主であつたら七人乃至十人の水夫を使用してゐるので、その收入は相當の額に上るのである。

以上の様に甚だ收入は多いくせに、彼等は必ず舊暦の正月、端午節、中秋節等になると御得意先へ行つて、節錢（心附）を要求する。また彼等はなかなか心得たもので、ちやんと得意先の家庭の誕生日やその他の祝日を調べて置いて、その日が來ると恭禧々々、祝儩健康などとお愛想を振りまきながら御祝儀をもらひにやつて來る。もしこの節錢やお祝儀が少かつたら、當然のやうに文句をつけるし、やらずにほつておけば臺所の水镃鑵を覺悟しなければならない。

斷水された様な場合、しやくにさはるからと云つて、他の水道に替へようとしても他の水道主は決して承諾しない。前の水道主に面子をたてて拒絶されるのが關の山である。たとへ他の水道主が應諾しても必ず水道主と水道主との間に悶着が起る。このためにお得意先をうばつた水道主は、うばはれた水道主から迫害を受けて殺されても文句は云へないのである。丁度日本の博徒の仁義がこの水閥の內にも行はれてゐると思つたら間違ひない。

また水道境界が不明瞭なため境界爭ひが屢〻行はれる。この境界爭ひは徒黨を組み、棒切や刀を持ち出し、血を見ねば納らないほどの激烈な爭ひをやる。このために一人や二人の死人を出すことも珍らしくない。これも舊軍閥や國民政府時代の市當局がぐうたらであり、水閥から多額の賄賂を收めてゐたので、こんな爭ひさへ取締ることが出來なかつたのである。このために水閥の横暴は日毎につのり、その內部の眞相は現在局外者に窺ふことの出來ないものになつてゐる。

國民政府時代、市當局者は申譯的に井業改善を目的とした井業公會なるものを設立したが、この公會に加入したものは北京全市の水夫八千餘名の內、約二百名であつて約九割六分は會に加入しないで、水閥を結成してゐるのである。この水夫の九割五分までは山東人で占めてゐる。彼等は滿洲行の苦力の様に、せんべい巻にした蒲團を肩にかけ北京に出稼にやつて來る。最初山東人が職に就くのは山東飯館子のボーイか又は井水業者の水夫に限られるといはれてゐる。元來北京市內の職人は昔から出身省別に職業が定つて居て他省出身者の仲間入りを拒絶する風習がある。例へば保定人の風呂屋、楊村出身の壁塗屋、山西人の錢舖等である。

山東の田舍から出て來た彼等はまづ北京に永く住む同郷親戚によつて井戸主に紹介され、始めは汲水作業に携はるのである。井戸主は飲食を給する外に一月小遣錢として三四圓を與へる。一ケ年も經てば汲水作業の餘暇に水車押しを練習して腕を磨く。そのうちに水道主の家に水夫の缺員でも出來れば水道主に紹介されて、水夫として住込む。水夫の待遇は飲食を給せられる外に月七、八圓の勞銀を與へられる。

彼等の唯一の樂しみは國に歸つて妻帶することと水道主になることで、それを夢に描きながら一日二、三錢の零細な金を殘していくのである。

童謠

過年來了

古川賢一郎

臘八兒祭竈
年下來倒
妞家要花兒
小子要炮
不識業兒哩老婆兒要個大綿襖

臘八粥も食べました
かまど祭りもすみました
もうすぐたのしいお正月
かんざし欲しいは女の子
爆竹欲しいは男の子
慾ばり婆さん、綿入れ着物がほしいとさ。

子供達は唄ふ。子供達にとつて正月はたゞわけもなく夢のやうな世界だ。爆竹を鳴らし風箏を揚げ晴衣を着て、とんではねて新禧新禧である。然し貧しい子供は知つてゐる。

○

年來了、是冤家
兒要帽、女要花
爸々要臘燭敬菩薩
媽々要糯米做粉粑
媳婦要衣裳走娘家

來たよ正月、かたきだね
坊やの欲しいは帽子とさ
花かんざしは女の子
父さん、燈明ローソクほしいだろ
母さん、團子のお米がほしいだろ
嫁さん、着物ほしけりや里へ行け

然し子供の世界はなんと云つても樂しい。いくつ寢たらお正月だと胸をどらせ、まなこ輝かせる頬ぺたの赤い子供の姿は日本の子供と同じである。

○

二十三打發竈爺上老天
二十四掃房子
二十五拐豆腐
二十六割塊肉
二十七殺個鷄
二十八殺個鴨
二十九蒸饅頭
三十挑旗兒
太年初一兒
撅屁股亂作揖兒

二十三日かまどの神様昇天だ
二十四日はお家の掃除
二十五日は豆腐を作り
二十六日肉料理
二十七日鷄しめて
二十八日鴨しめて
二十九日は饅頭むし
三十日は旗たてゝ
正月元日お尻をつん出し
何んでもかでもぺこ／＼お辭儀

除夜から元日の朝まで、爆竹が夜どほし鳴り出す。爆竹は子供の心のやうにぱち／＼はねる。新しい春聯の紅い紙が、歳の初めの心情を明るくする。門に貼られた門神の、石版刷りの色あざやかな神様を見てゐると、どんな怖い鬼だつて僕の家へは這入つて來ないだらう。大砲の彈丸でも戰車でも、この神様が門のところで頑張つてゐればとにかく大丈夫なんだ。

新禧新禧、元日の朝家中の人達に挨拶をすませると、年末から作つてある御馳走が喰べられる。口に入れると舌が燒けさうなあつい餃子(肉饅頭)。君はいくつ喰べたかい。僕はいつぺんに二十箇位平氣なんだぜ。團圓(饅頭)だつて負けないぞ。年糕(お菓子)ならいくらでもへつちやらだい。

○

正月正
大街小巷
掛紅燈

お正月
あのまちこのまち
紅い燈籠ぶーらぶら

これは天燈である。暗い寒い胡同奥でぽつとともつた燈籠を見ると、子供でなくとも幼い暖い感傷につまされるであらう。

正月は逛廟(お寺の縁日)が嬉しい。二日の元寶湯(わんたん)八日の元宵餅(米の粉の團子)と喰べて見給へ。支那人でなくとも支那の正月には必ず魅せられるだらう。まして十五日の元宵節(燈節)の夜こそ、民衆の古い魂を祭るまぼろしの風習だ。あゝ子供達の唄聲がきこえる。

ちよん　ゆえ　ちよん
たあちえ　しやおしやん
くわほん　とん…。

支那芝居雜觀　8

服裝とりどり

石原巖徹

支那劇は普通時代物を演るので、服裝はすべて昔風のものであるが、必ずしも或時代―その劇に語られた時代―に卽してゐるとは限らない。唐、宋、元、明、清各時代の服裝を參酌して、一種獨特の劇專用服裝を案出したものである。現行支那劇用服裝は大體淸朝の末期頃に、完成したものであるが、其後も多少新機軸が編出されてゐる。梅蘭芳に依て創始された女形の服裝に「古裝」と稱せられるのはこの新機軸の隨一のものである。これは支那の昔の美人畫に描かれた婦人の服裝を模したもので、從來の女形の服裝―上衣と褲子（ズボン）或は裙に依て構成せられた―に比し遙かに優美可憐である。

服裝には朝野の別が明瞭であつて、官位に在るものは、文官武官それぞれ相當の模樣の刺繡のある長衣を被、腰に玉帶と稱する輪をつるし、頭には纓の附いた冠をかぶる。野に在る者は、それらの物を全然用ひず、普通の柄の衣服に頭巾を冠るだけである。武將が戰爭に出る場合は甲冑―無論輕い物で造つた模造品―を被る。一方の大將格の者は三角の小旗四本を背中に負ふ。これは威風を示すためである。武人が旅行する場合は箭衣と稱し馬褂樣の上衣（刺繡あり）を被て劍を腰に吊る。劍客や綠林の豪傑等は、身體にピツタリとした衣服を被、上衣の胸の處に肋骨樣の掛け紐を裝飾的に附け、帶を前に結んでその端の馬簾式になつたのをダラリと垂らす。この垂れ帶はみえを切る場合に、いろいろ弄んで役に立てる。綠林の頭分が登場する場合はその上にドテラ樣の大衣をひつかけて出て來る。道術家或は軍師の類は八卦衣と稱し八卦の模樣（普通金色）の入つた大衣を被る。これの代表的なものが三國志の諸葛孔明である。乞食同然に零落した人の場合は黑の地に赤靑白黃等の小巾を縫ひつけた長衣を被る。襤褸をまとふといふ意味である。但し本來の乞食には用ひない。

女形の服裝で、女將軍の場合、甲冑を被るが、女らしさを失はないやうに工夫がしてある。肩に雲肩と稱する肩掛樣のものを著け、前腹部から裾へかけての鎧の造り方が、如何にも女らしい。善良貞淑な女の場合は、前述の古裝の場合は別として、褲子（ズボン）を露はさず必ず裙（行燈袴樣のもの）を著ける。ヴアンプ役や道化役の女の場合は短い上衣に褲子だけである。今日一般支那婦人間に流行してゐる褲子無しの長衣は旗袍と稱し元滿洲旗人の婦人の盛裝に用ひた樣式であるが、支那劇では遼の國の婦人にこの服を被させてゐる。卽ち、有名な四郎探母劇のヒロイン遼の鐵鏡公主はこの旗袍を被て、頭に兩把頭と稱する派手な帽子を冠る。これと同じやうな行きかたは男の場合にもあつて、遼や金の國の役人などを現はす場合、淸朝時代の役人の制服を被させることが多い。これは恐らく正確な風俗考證の上から來たものではなく、遼や金が淸と同じく滿洲地方の民族の國家であつたところから、時代を問題外として、約束的にさうしたものと察せられる。

中國以外の民族の服裝に對する支那劇の取扱方はデタラメが多く、例へば尙小雲の十八番「摩登伽女」は印度佛敎に關する時代劇であるが、印度の女の服裝を現代式の洋裝にして、盛に惡趣味な色氣を出してゐる。

奇藥妙葯

宇澄朗

藥屋の看板

一 虎骨酒

虎骨酒といふと、名稱が名稱だけに虎のやうな怖るべき元氣を漲ぎらせる素晴らしい强精劑であらうと誰もが想像し、更に一歩を進めて、例の方の極祕藥ではないかとも推測を逞しうする人があるに違ひない。實際、さういつた想像推測の下に、この酒を買つて行く日本人が多いし、又しきりにさう吹きたてる支那通も多く、しかもこれを服用して、その方の特效を體驗禮讃してゐる人もこれまた尠くない。

强精藥としての虎骨酒は、その效能書にも補賢の效ありとしてあるし、また事實上、さうあるべきことに首肯させられるが、しかし乍ら御酒の本道的な奏效目標は、實は神經痛やリューマチスにあるのだ。

十數年來、知人から「神祕不可思議な奇藥が支那にはあるさうだが、何か神經痛やリューマチスの靈藥はないものだらうか」と訊ねられるごとに、私はいつも必ずこの酒を送つてあげる。もとより百人が百人とはいへないけれども幸に全癒した喜ばしい實例もかなり多くもつてゐる。

一昨年のことだつた。所用で冀東の昌黎にゆき、日本の某旅館に宿つたところ、女將が寢込んでしきりに苦しんでゐた。訊くと、十餘年にわたる執拗なリューマチスが例年のやうに再發したといふので私は北京に歸つてから、例の如くこの酒を一瓶――ビール瓶に詰つてゐる――を贈つてあげた。やがて三週間もたつた頃、女將からいとも鄭重な手紙が屆き、毎日朝夕二回服用し、僅かに瓶の頸だけしか飲まないがそれでさしもの痛みがぴたりとやみ、今は起きて炊事、洗濯までしてゐると書きつらね、お世辭もあらうが、私を命の救主でもあるかのやうに、心からなる禮をいつてきた。そしてまた昨年も、お蔭で遂に出なかつたといふ便りをもらつた。

私は決して御藥酒宣傳のお先棒を擔ぐ者ではないが、さういふ禮狀を戴くごとに、あゝいゝ人助けをしたと蔭ながら悅んでゐる。

虎骨酒の製法に就いては、いはゆる祕傳もので、輕々しく喋つて異れるわけのものではなく、私はまだ詳しく知らないけれども、兎に角、本物の虎の骨を少なくも十年間ぐらゐは燒酒につけ、虎の骨のもつ精分がアルコールによつてすつかり溶解抽出されたものであらうことは想像される。從つてこの酒は强烈で舌にぴりツとくるが、味はなかなか良く、その上日本酒の盃で朝夕わづかに一杯づゝ飲めばいゝので、服用は至つて樂である。しかしそれにしても、アルコール分を絕對に忌む神經痛やリューマチスに、アルコール分の極めて强烈なこの酒が靈藥だとは、たゞたゞ不思議といふほかはない。

本草によれば、虎骨は骨患に奇效ありと述べてゐるし、また中國藥物大辭典には、猛虎の精力は擧げて前脚に存す。故に前脚の首は藥效殊に著し、とある。

虎骨酒は、やゝ大きな藥舖では、北京ばかりでなく、何處でも各自製劑販賣してゐる。私は虎の骨に何等の知識ももたないし、また燒酒にしても、支那一といはれる有名な山西汾酒と滿洲の營口あたりで拵へる高粱酒との區別さへ舌の上で飲みわけの出來ない酒嫌ひであるが、一切の懷疑をうつちやつて、たゞ北京隨一といふ大店、淸朝とほゞ年代を等しくする歷史的な存在の老舖で、かつまた社會的に驚くべき信用を博してゐる同仁堂の虎骨酒のみを十數年來ずつと今なほ續けて買つてゐる。

同仁堂といへば、凡そこんな頑固極まる店はまたとあるまい。私の日本の友人が、その虎骨酒に隨喜し、これを東京で代理販賣しようと思つてかけ合つたところ「この酒はさう簡單に速製できるものではないので、弘めて戴くと、商賣の分が缺乏してしまふから却て有難迷惑だ。また假りに多量を買つて戴いても、當店には開闢以來卸値といふものがなく、一瓶でも千瓶でも、同價で差し上げるより仕方がない」といふ返事で、あいた口がふさがらなかつた。

また同仁堂の令孃で私の知人の某夫人が、或日お里の同仁堂で藥を求めたところ、蟇口を忘れて來たので、帳面につけて置いてくれるやう命じた。すると「たとへお店のお孃樣でも、店の規則は一文の掛賣りも許しません」とあつて、どうしても品物を渡さなかつたといふ話を、私はその太太から聽いたことがある。

二 玉蓉丸

丸の字がつくと、いかにも藥らしいが、これは飲んだり貼つたりするお藥とは違ひ、實は、御婦人の顏のキメを細かく美しくする一種絶妙の艶出しシヤボンといつた方が適當だ。

ガラスを磨くにしても、揮發油なりまたは熱い湯で先づ汚れをとり、それから乾いたタオルか何かでよく拭かなければ艶は出ない。況んや顏に於てをやである。

普通に使はれてゐる西洋流の石鹸というものは、いかに高價な良質のものであつても、要するに垢取石鹸たるに過ぎない。垢を取つたそのあとで、今度はみがきをかける何物かを使はなければ、白玉のやうな艶は決してお顏のキメに出るものではない。クリームの類ひでは荒れ止めか化粧下の用にしか過ぎないし、おしろいはまた單なる顏の塗料だ。いづれも艶出料ではない。あれほど多種多樣のお化粧品がありながら、一體日本にも西洋にも、御婦人の皮膚の美しい艶を出すどんな化粧料が發明されてゐるのか。これは化粧化學にとつて、奇蹟的な大きな失念ではあるまいか。この玉蓉丸こそは實に世にも珍らしい皮膚の艶出しシヤボンなのである。

北京のは、西洋風の石鹸輸入以前の昔から、垢取石鹸と艶出石鹸とがちやんと初めから分れて發明され、且つ長い間一般に使用されてきた。科學的に觀てこれは驚嘆に値する事實である。

垢取石鹸は猪胰子といひ、艶出石鹸は卽ちこの玉蓉丸である。猪胰子のお話はまたの機會に申上げよう。

玉蓉丸の大きさは、ピンポン球より一廻り小さく、色は眞ツ黑、舌の先でちよつと嘗めてみると、もろ〳〵の漢藥の錯雜した臭ひと味がするが、兎に角頗る甜い。その甜さはどうも黑砂糖に似てをり、また蜂蜜らしい甜味も多分に舌感に觸れる。恐らく皮膚の艶出しに有效ないろ〳〵な漢藥を、黑砂糖と蜂蜜とで練つたものではなからうかと思はれる。さういへば、日本でも江戸時代には、黑砂糖が皮膚にいゝとされて、下町の女性にはたいへん悅ばれてゐたし、また最近それが返り咲いて黑砂糖石鹸といふものが流行しかけてゐる。

普通のシヤボンでお顏を洗ふ。それで垢がとれる。その次にもう一遍この玉蓉丸を普通の石鹸のやうに使つてお顏を洗ふ。かうしてまあ半月も續けて御覽あそばせ。お顏のキメの如何にスベスベ細かに美しくなられたかは、鏡の上にもはつきり映るし、また手觸りでも確實にお判りになるであらう。

數年前、日本の一文士が來て、鋭い眼を北京の支那女性に向けていろ〳〵觀察したことがある。一日、

『東京の電車やバスに乘ると、大抵一人や二人のソバカス女性と乘り合はせるが、北京では未だ嘗つて見かけたことがない』

と、いかにも一大發見でもしたかのやうな顏つきで、話したことを憶えてゐる。さういはれると、私も北京ではめつたにソバカス女を見かけたことがないし、また北京の支那女性たちの、日本の女性のやうにむやみに塗りたてずに、しかも顏のキメの美しく細かいことは今さら驚く。

顏の皮膚のキメには、食物から來る内的作用も可なりあるに違ひないが、かうした玉蓉丸のやうな珍品が使用されてゐるその效果もまた無論のことである。

この玉蓉丸は丸の字がつくので化粧品屋では取扱はず、各著名な藥舖で自製販賣してゐるが、これも前述の虎骨酒と同じく、同仁堂のものが、何んといつても質の上に安心がおける。

一丸四錢ぐらゐのやうに記憶する。

問題視される北支物價の騰貴

北支の物價昂騰は日とともに漸增の一途を辿つてをりしかもそれが日常必需品に於て著しいので、庶民生活に多大の支障を招來しつゝある。殊に月收のきまつてゐるサラリーマンの懷中に及ぼす打擊は甚大なものがある。北支の物價は、北支經濟のセンター天津の動きによつて其の大體を察することが出來よう。いま昨年十月十六日現在の天津市社會局調査による天津市小賣物價指數(民國十九年平均一〇〇)を見ると、燃料類の昂騰が特に著しく、昨年十月の一八七・四八のものが、本年十月には二七六・四〇で、八八・九二の激騰を示してゐる。冬季に向つての折から、その影響するところが大きい。次に衣服類が昨年十月一一六・一六のものが本年十月一九八・六三と、指數に於て八二・四七の増加となつてゐる。小賣物價總指數平均に於ては、昨年十月に比較して本年十月中旬の物價は、北支の物價對策の努力にも拘らず、指數六九・三二の増加で四割三分弱の騰貴を示し、各方面に深刻な波紋を投げかけてゐる。天津小賣物價指數を表示すれば次の如くである。

類別	十月十六日	昨年十月
食物類(三二品目平均)	一九七・九六	一三八・六一
衣服類(九品目平均)	一九八・六三	一一六・一六
燃料類(八品目平均)	二七六・四〇	一八七・四八
雜品類(五品目平均)	二二二・二五	一三二・四九
總指數平均(五四品目平均)	二〇八・九七	一三九・六五

隴海線復興の躍進と新建設への効果

長江航運と併行して奥地物資輸送の幹線であつた隴海線(連雲—寶雞間)は、事變後全く停止狀態となり、その急速な回復は一時絶望視されてゐたが、軍鐵一如の努力は遂にこの難事を打開した。即ち同線は昨年九月開封—徐州間(二七六・八キロ)次で本年六月徐州—新安間(一〇八・九キロ)が復舊され、十一月下旬遂に懸案の連雲港までの通車を完了した。かくて全長千二百三十二キロのうち五百餘キロを復舊建設し、約四割餘が華北交通會社の營業の下に活潑な運輸活動を開始した。この開通の利益は左記の如くである。

(一)海州製鹽工業の復活。所謂淮鹽の名によつて著名な同地方の製鹽は事變後全く停頓してゐたが、同線の開通で諸物資供給力の强化と共に本格的製鹽事業の進展が期待され、維新政府は既に同地方鹽田民(製鹽勞働者)に十萬圓の補助金を支給した。(二)大運河航路との連絡。目下皇軍が徹底的に殘存土匪掃蕩中の大運河區域は、治安確保と共にその運輸機能を發揮し、土産物資の重要流通幹線となることは必然であるが、現在は大運河—長江—上海への出廻りは航運上に制限があつて不便多く、却つて隴海線を利用して連雲港—上海またはその他各地へ出廻る方が便利とされてゐる。從つて隴海五百粁の回復は、沿岸物資供給と相俟つて現在の長江物資以上の多額に上ると見込まれてゐる。

大陸での活躍は支那語から

內地の各驛から華北交通會社に最近轉勤した鐵道從事員五十數名は、仕事の餘暇を割いて毎日、北京站貨物取扱所の二階廣間で支那語の勉强に向う鉢巻き。その中には驛長四名、助役が十九名、年齢も最高四十五歳から二十歳位まで、何れも鐵道にかけては腕に覺えの猛者ぞろひだが、大陸の土を踏むのは今度が初めて大陸での活躍は支那語のマスターからと張切つてゐる。先生に選ばれたのは同站案内の朱藝さん(二〇)、許啓徽さん(二三)の二孃、毎日交替で教壇に立つ。何れも大學出の才媛、更に中央鐵路學院に進み、昨年十月北京站に配屬されたもの。容姿は端麗、心意氣は明朗な興亞型、評判の案内孃である。教授をうける實習生はお父様のやうな人から弟みたいな連中まで、いづれも頗る熱心だ。髭をたてたおぢさん達の雀の學校の調子よろしく「イー、アル、サヌ」と先生のソプラノについて野太いバスが發音の練習に大童。支那語一年生の感想を聞くと、「ともかく一所懸命で支那語の勉强です。鐵道のこととあれば一歩もひけをとらぬが、支那語はちよつと勝手が違ふ。だがこれも鐵道報國の一念で屹度克服してみせますわい」は甚だ心强い。

懸案の膠濟線夜間列車實現

華北交通會社が北支蒙疆全線に亘つて十一月一日から實施した列車運轉時刻改正に伴ひ、豫て懸案となつてゐた膠濟線の夜間列車運轉が行はれることになつて、青島—濟南間旅客列車の二本建が實現し旅客輸送は混雜を著しく緩和した。その上津浦線各列車との濟南の接續も、日本、大連、上海航路との連絡もついて頗る

便利だ。殊に膠濟線の夜行列車と天津—濟南間の夜行列車運轉實施で、北京天津方面および南京、徐州方面と青島方面との旅行者は濟南一泊が省略できるので旅行時間が著しく短縮せられるわけだ。また坊子以東の旅客は青島への日歸り旅行が出來ることゝなり、青島—濟南間の旅行時間は從來十二時間餘りであつたのが、上り下り何れも約二時間の短縮が出來た。

大陸の一偶に築く愛の學校

現地前線から北京に歸つた人が『坪田讓治の小說にしたいやうな大陸の美談だ』と感に堪へて物語つた一とくさり——。津浦線李家莊驛長山田政逸君（四一）が着任したのは北支の冬のまだ去りやらぬ昨年三月の頃であつた。現地の劇務の忙しさは君の想像にまかせよう。生來子供好きの彼は、着任早々、ポケット・マネーをさいてさゝやかな山田日語學校を開設した。日支親善の基礎を築くは中國小國民の教化から……といふ確信に燃え、劇務のあとの休息も忘れて每日自ら教壇に立つた。子供等はすつかりなついて面白いほど學科が進んだ。

—間もなく山田君は陳立業君といふよき助手を得た。この陳君といふのは舊廿一師の參謀であつたが、彼の恩師たる廿一師長劉珍年がさき頃蔣介石一味のために謀殺せられて以來、蔣に對するこれまでの信賴を裏切られた幻滅の苦惱は、豁然迷妄を開いてしんそこ日支提携の意義を理解するやうになつた。自ら進んで歸順宣撫の工作に參加するうち、山田君の義擧に打たれた陳君は山田日語學校の教師を無報酬でと申出でたわけだ。それから二人は手を携へて協力、新讀本の編纂にまで手を伸し兒童の數も目立つて殖えて來た。ところが、華北交通の隴海幹線營業區間の伸長にともなふ人事移動によつて、山田驛長は東隴海線八義集驛長に榮轉することゝなり、子供達は泣いて別れを惜み、宥めすかしてやつと赴任した。山田君の去つたあと、學童の山田先生追慕の情は如何にもあはれで、見かねた陳君はいぢらしい子供達をつれて山田先生を訪ねることゝした。この申出を受けた〇〇部隊宣撫班の濱地宣撫官や佐々木指導員は、早速各方面に溫い手配斡旋をし、旅裝準備も整つて陳君は、山田君が最初から手鹽にかけた六歲から十三歲までの十人を引率して李家莊から遙々八義集まで徒歩で三日の旅をつゞけた。陳君の一行は十月廿四日、無事八義集を訪ねて「瞼の恩師」山田驛長と嬉し淚の對面をとげた次第だ。頑是無い子供達だけに思ひかなつた喜びをそのまゝ、又の會ふ日を約していそ〳〵歸途についた其の時の樣子は、今も眼に見えるやうに殘つてゐるが、今更に愛情の築き上げるものゝ尊さに頭がさがつたと。

北京に増える中商工業者

十月現在北京へ進出の邦人四萬五千そのうち中小商工業者の數が最近非常に目立つて來た。今春以來のその增加ぶりは、一ケ月平均百四、五十名にのぼつてゐるが、このうち三萬圓以下一千圓以上の資本を擁して營業してゐるものの最近調査による投資額を見ると、合計で一千九十六萬九千四百圓にのぼつてをり、その地域別內譯は東城地區に六百三十八萬八千八百圓、西城地區に二百四十八萬八千五十圓、外城に二百九萬二千五百五十圓となつてゐる。その職業は大體四十七種にのぼるが、それを第十位まで左に表示すれば（單位圓）

職業	金額
土木建築請負	一一六一、九〇〇
食料品雜貨等	一一一〇、七五〇
旅館業	八二五、五〇〇
料理業	七九八、五〇〇
飲食店業	六九五、七五〇
自動車業	六〇〇、〇〇〇
器具、機械業	四八四、四〇〇
食料飲料製造	四六四、〇〇〇
下宿貸間業	四四四、九五〇
質、古物商	四〇七、〇〇〇

となつてゐる。これを少し冷い目で見ると、この現實の數字が、日本人といふ民族の中には異境に出てもお故鄕ぶりの生活をせねば我慢の出來ない人間の如何に多いかを雄辯に物語るものであることに氣付くに相違ない。蓋し右の職業は、自動車業と器具、機械業をのぞいて他はすべて支那人相手のものでなく、日本人が支那家屋を日本風に改造するためとか、日本料理を喰べるためとか、故國の雰圍氣にひたるためとかの要求から生じ且つ成立してゐる職業であることは、誰しも容易に想像出來ることであらう。ことに一流の料理屋、カフエーの類は、資本金三萬圓以上のものとして、前記の表には加へられず、その數字は相當多數に上ることであらうから、日本人の島國的鄕愁癖は更に强調せられてゐると見ることが出來よう。

十六日（舊十二月八日）

▽臘八・即ち臘月の八日である。この日は佛教では釋迦悟道の日として成道會と謂つてそれを記念するために粥を煮て佛前に供し、僧侶達もこれを食べる。この粥を臘八粥と謂つて、一般民家でもこの例に倣つてゐる。この粥は米の他に粟、棗の實、栗の實、菱の實などを入れて雜炊にしたもので、粥が熱したら大碗に盛り、その上に、乾葡萄、落花生、桃や杏の仁（種）瓜の種など點綴して色を著ける。尤も簡單な作り方もあり、此頃一般に作るのは略式なのが多い。その材料は粥米と謂つて、十二月に入ると市中の米屋で取揃へて賣出すので、案外便利に買集められる。民家ではこの日早朝から粥作りに忙しい。（粥と云つても日本のと違つて全くの流動食ではないので碗に盛る事が出來る）さて出來上つたら先づ家中に祭つてある神佛に供へ、その後で家族一同が食べる。家によつては犬や猫や鷄などにも食べさせ家の柱、扉、壁やら庭の樹木にまで塗りつけるのがあり、門扉に貼られた門神の口につけたりする。

それから親戚知友、近隣にも贈る慣はしで、それには果物や漬物を添へ、必ず午前中に屆けるのが禮儀とされてゐる。この粥を食べると寒さに中らず厄病や災難を免れると謂ふ。この日は里歸りしてゐる嫁も歸つて粥を食べる。でないと家が貧乏になると謂ふ。又この臘八の日は吉日として婚禮が多い。その行列が街中をたくさん通る。

三十一日（舊十二月二十三日）

▽竈祭・即ち竈の神樣の昇天を送る祭りで、この日が近づくと、市中に飴屋が澤山出る。崇文門外の花兒市や東四牌樓西の隆福寺の露天市場などでは金紙作りの神龕を賣出す。城外の百姓が胡麻桿と扁柏の枝を天秤棒に擔いで賣りに來る。皆お祭りの材料である。

當日になると竈を清掃してその上に神龕を安置し、その中に新しい竈王の神像を奉安する。この神像は竈王

色の繪刷紙で、これに單座と雙座がある。雙座の方は奶々（夫人）と並んで御座るもので、女氣のある家で用ふ。單座のは男ばかりの家庭や商店で用ふ。

さて神龕の前に壇を設けて、香爐と燭臺を置き、飴と水を供へ、傍に豆と秣を添へて置く。この豆と秣は竈王乘用の馬の飼料である。この他竈王の旅費として金銀の元寶や紙錢と竈王昇天の梯子になる千切紙（日本の御幣のやうな紙片）それに胡麻桿と柏の枝。白飴は竈王に奉る唯一の御馳走である。竈王は、平常毎日竈を使用させて下さる半面、一年中家人の言動を監視して居て、この二十三日の晩には昇天して、天の神にその善惡を報告なさる厄介な神樣である。それで白飴を御馳走して、機嫌をとり、同時に口が粘つて報告の時色々喋れぬやうにと謂ふのである。實際にお祭りした後で飴を水に濕らし神像の口に塗る者がある。

竈王昇天の出口は窓で、胡麻桿を窓にかける。煙突を通つて行かれると謂ふので、火口で神像を焚く者もある。西洋のサンタクロースに似て面白い。竈王に就ては說が多いけれど

て當日崇文門外花兒市の廟でお祭りがある。但しこの二十三日には廟は何事もなし。倚南方人は二十四日に竈祭を行ふ慣習である。この竈祭には婦女子を禁ずるので、女不祭竈と謂ふ。（仲秋節は男不拜月と謂ふ）

また竈祭は小過年と謂つて、これが過ぎたら愈々正月準備が始まり、歲末氣分が濃くなつて行く。街頭の風景も頓に精彩を加へるが商取引では總決算期で最大難關がやつて來る。

〔表紙寫眞〕北京西便門外にある、北京最大の道院、白雲觀の縈喜文字。

昭和十四年十二月十五日印刷納本
昭和十五年一月一日發行

一月號
（毎月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局資料課 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 君島潔
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房
振替東京六四二二三番
電話九段（33）一四一五番
三三四四番

一冊定價 三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

廣告取扱
大阪市西區京町堀上通一丁目二五
一手取扱所 一新社
電話土佐堀九三九